
原作？なにそれおいしいの？

gong

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

原作？なにそれおいしいの？

【Nコード】

N0440N

【作者名】

gong

【あらすじ】

主人公は元日本人。大学からの帰りにトラックにひかれ、気づいたら転生していた。しかも、死んだ先は”ゼロの使い魔”の世界。なんとというテンプレ的展開。原作介入？平穏な生活？主人公最強なウハウハ生活？いくつかのチートを駆使して、今日もハルケギニアで生き抜きます。けどまあ、基本的に所詮は平凡な元日本人です。　　＜傾向＞タイトルに関わらず今のところ力及ばず原作沿い、テンプレ、設定改造、10巻程以降の設定はつまみ食い程度、主人公の精神は平凡、パロネタ多め。　　この作品は

Arcadiaでも投稿しています。現在は作者の不手際で向こうの更新ができていませんが…向こうでは向こうのルールを守るようにお願いいたします。

【01話】 ありのまま起こったことを話すぜ…

死んだと思ったら異世界で転生した。

妄想乙とかテンプレ乙とかそんなちやちなものじゃ断じてない。
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

大学に入り、なんとか就職氷河期の荒波を乗り越えて、ある企業に内定をもらい、来年度からは晴れて社会人。

そんな新しい人生の幕開けに踏み出しかけていたある日、俺は死んだ。というか死んだはずである。

学校の研究が遅くまでかかった深夜の帰り道だった。

一般道を時速100kmはあるのでないかというスピードで走るトラックが信号無視をして俺に突っ込んできた。

ライトで視界が真っ白になる中、俺は死を確信した。

ああ、これならきつと即死だから痛くない

前の人生の記憶はここまで。

気がつくと誰かに抱かれている感覚とともに、ぼんやりとした視界で西洋風の女性が優しそうな笑顔を浮かべていたのをなんとなく覚えている。

はつきりと前世を思い出し、意識を持てるようになったのは2歳の頃からである。

自分が転生を行ったとわかった時、最初はありがちなチート人生

を想像して歓喜した。そして直後、それ以上に恐怖し絶望した。
転生というイベントでこうなるとは予想できなかった。

ただ、自分が22年かけて構築し、よもや壊されるとは思っていなかった世界観というものは思っていた以上に自分の根幹を担っていたらしい。

転生は自分にとって比較的悪くないことだから良い。

しかし転生がありえた以上は、今までは同じくらい信じられなかったことが、信じられないぐらいの悪意をもって自分を襲うことがないという保証もなくなった。

そして、転生というこの世の理に逆らう所業を犯してしまった自分には、その代償として大きな悪意がきつと襲い掛かる

一度そう思ったらその思いは拭えなくなってしまって、この頃の俺は多めに泣いた。

精神年齢24歳にも関わらず、ものすごい泣き虫と化した。怖くて、どうしようもなかった。

1つ年下の妹がいたのだが彼女を巻き込んで昼でも夜でも泣いた。言い分けをさせてもらえば、精神状態が身体に引っ張られたのも原因であると思う。

そんな時は母が必ず抱いてくれた。おねしょでも空腹でもないのに、泣いてることがわかると彼女はにつこりと微笑み

「大丈夫よ、ママがいるから。大丈夫。」

と、俺と妹を胸に抱きながらささやくのだ。

実はこの時、何を言われているのかはあまりわかっていなかったのだが、そうされると心が暖かくなり、不思議と恐怖は和らいだ。

この頃の俺にとってはこの母の腕の中だけが唯一安らげる、聖域だった。

結局この恐怖心からの大泣きは1年ほど続いたが、時間が解決してくれた。

まあ大丈夫だろうという漠然とした淡い期待と、万が一何かが俺に降りかかろうとも乗り越えてみせるという覚悟が半々で心の中にうずまきつつ、なんとか安定を保ったのだ。

それからまず、言語の習得をおこなった。英語に似たラテン系らしき言語だったのでそこまで苦労はしなかった。

その後は世界観などの情報収集を行いつつ、幼少からの英才教育を自分に施した。小さい頃の脳、まじパネエ。

家族は俺のスタートダッシュぶりを大いに喜んでくれた。

一方、一部から『悪魔の子』などの謗りを受けるのも免れなかった。

だが、恐怖心を克服するためでもあったため、俺にそういった世間体にかまっている余裕はなかった。

半ば脅迫概念に追われる形で、メーター振り切りの努力は今なお続いている。

コンコンと部屋のドアがノックされる。

「ウイレム様、魔法の勉強の時間でございます。ケティ様はもう向かいましたよ。」

ウイレム・ド・ラ・ロッタ、それが今の俺の名だ。

アニメとSSのみで原作は知らない作品だが、間違いなくここはゼロ魔の世界で、原作に少し出ていたケティの1つ上の兄。多分才

リキヤラ。

そんな転生先で、今日も未来に向けて自分を鍛えてます。

倒すべきはこれから来る時代の流れと…ギーシュ…!!

貴様に妹は泣かせない!!

【01話】 ありのまま起こったことを話すぜ…（後書き）

はじめまして。gonnaと申します。

至らぬ点が多い駄文となると思いますが、よろしく願いたいします。

【02話】 科学知識はおいしいです

この世界がゼロ魔だと理解した俺が最も魅かれたのは当然、魔法だった。

そこで、言語などが一段楽しめた6歳の頃に両親に嘆願し、魔法の家庭教師をつけてもらい魔法の勉強を本格的に開始した。

レビテーションで初めて物が浮いた時は、本当に嬉しく年柄もなくはしゃいでしまった。

気を良くした俺は、ケティに頼まれてレビテーションで高い高いをして母に怒られた。

以降は母に隠れてしてあげている。念のためベツトの上で。

「あにさま、おねがい」

と、目を輝かせてくる妹はかわいい。断れるわけがない。

時々、かわいさのあまり、レビテーション中に手元が狂い、落ちてくるケティを抱きしめる。

計画通ゲフンツこれは、ケティが全面的に悪いと思う。

「びつくりした、えへへ。でも、楽しい」

とケティは笑顔で言う。かわいい、かわいいは正義だ。なのでケティは悪くない…あれ？

と話がずれてしまったが、俺の魔法は周囲に天才とか、やはり悪魔の子とか言われる速さで上達していった。

恥ずかしいので詳細は省略するが、色々な人が俺を怪しむ中、両親とケティの存在は本当にありがたかった。

転生という後ろめたさ、世界観の崩壊と、結果生じた脅迫概念的な「力」への渴望、それらで精神的に限界な時に、他人からの疑心

の目結構はきつかった。自分でも異常なことがわかる分、特に。そんな中、母からの無償の愛情、父の目が語る信用、妹からの混ざり気の無い信頼は「この世界の自分」の居場所を作った。

再び話を魔法に戻すと、本人から言わせてみればただのチートであるし、両親からは、

「十分凄いのだから、焦らなくても良いのよ（だぞ）？」

と、心配される程の努力はしているので伸びてくれないと困るところだった。

このころの俺の1日は睡眠・食事・魔法・一般教養・魔法の勉強と特訓・ケティだけである。

……割と普通することを網羅している気もする。

だが、すでに成人精神＋死の体験のおかげか、一級のメイジ以上だといわれた精神力総量を毎日ほぼ使い切っていたのだから、子供の割には過酷な日々だったと思う。

ちなみに、精神力を使い切って回復した後に精神力総量が増えることはなかった。

なので、おそらく自分には精神力総量の伸び代はあまりない。つまり魔法に関して、潜在的に今できなくて今後できるようになるというものが俺にはない。

そこで、小さいうちに魔法の基礎的なことは学べるだけ学びきり、その後に技術的な応用をしたり、魔法をとりいれた自分の戦闘体系を作り上げたり、人脈を作り政治に参加していくというのが第二の人生のプランだった。

元々、この計画は順調だったのだが、あることをきっかけに予想より大きく上方修正された。

自分で言うのもなんだが、少なくとも魔法に対する理解はおそら

くこのハルケギニアのなかでも飛びぬけた存在になってしまった。

結論だけ先に

？プリミルはマジでチート、多分神の領域。

？系統区分（火水土風）は実はそこまで意味がない。魔法の本質を劣化させ、ハルケギニアの人が理解し、使えるように略解されたもの。

？魔法の威力は精神力×想像力（理解度がもろに影響する）

思わぬ効果を挙げたのはディテクト・マジックであった。

例えばゴーレムにディテクト・マジックをかけてもこの世界の人間は魔法で土が動いているという結果しか理解しかできない。

後は、その精神力量とか。

この辺はその他の魔法に関しても母や父に何回も確認をとったのでほぼ間違いない。

あまりにしつこかったからか少し生暖かい目で見られてしまったのはご愛嬌。

しかし俺が行うと、もう少し現象の本質に近づいて理解できた。

「精神力が分子の構成、運動、働きに干渉する。時に原子構成にまで干渉する」

その様子がある程度わかったのだ。

この理解の違いは科学的素養によるものと推論している。そしてこれが系統魔法の本質であり、全てである。と思う。

基本的に精神力が分子レベルで物理現象に干渉するという一つ上の次元で魔法を認識できるため、火・水・土・風の区分は理解の上では原則的に意味のないものになった。

一応傾向は存在して、キーワードであらわすと。

火Ⅱ分子の振動。熱。エネルギー生成

水Ⅱ液体の操作・生命にも少しかかわる

土Ⅱ固体の操作・物体（形状など）・分子・原子の構成

風Ⅱ気体の操作・電子の操作（雷）

虚無Ⅱ謎。前世の記憶を信じるならば、多分時空。後、生物とかより複雑なものへの干渉じゃないかと予測

となる。

それにしても、本当にチートすぎる…。そもそも分子とかエネルギーを操れるという時点で人の領域を超えている気がする。

そして、それ以上の始祖ブリミルはマジチートだったと予想するのは難くない。

そして得られた結果は、なんとオリ主にふさわしい能力だった。何度考えても主人公補正乙。

？（同じ魔法でも）威力が桁違いに強くなった

？得意・不得意の系統がなくなった。（虚無は使えないけど）

ちなみにこれらの結果は十分に予想されたため、気づいた後の初の魔法はこっそりと町の近くで人気のない森林で行うことにした。

目の前には大木、今までの自分ならまあ半分くらいまでは切れるくらいの太さだ。

周りに人がいないことを確認し、ウインド・カッターを唱える。

前までは母が見せてくれたのを真似る様に「風の刃作り、飛ばすイメージ」だけど今回は違う。

空気中の分子を集め、収束させる、無駄な要素はいらない。ただ、超高圧の直線を作り、高速に飛ばす！

「ウインド・カッター」

期待のあまり鼓動が高鳴り興奮状態な自分を律するように、ボソツと呟くとともに魔法を放つ。

ヒュンツという音と共に風の刃が飛んでいくを感じた。
が、

「あ、あれ……」

特に何も起こらなかった。木にも目立つ切れ目がない。し、失敗？と思った矢先、目の前の大木がズズズと切断面に沿うように倒れていった。

大分威力が上がったことに満足を覚え、テンションがあがった俺はお代官様ばりににやり笑い、つい木にむけて

「悪いね」

などつつばやしてしまう。

その木が、それに呼応するように奥の木にぶつかりドンと音をたてた。

までは良かったのだが、そのぶつかられた木も倒れ、またその次の木も……と木のドミノ倒しは計5本に及んだ。

とりあえず目撃されないよう即座にその場を離れたのだった。

その夜、俺は興奮のあまり寝付けなかった。ベットの中で思い返

して、ようやく実感した「自分は『特別な力』を手に入れた」と。
今まで天才と言われてきた内容は俺にしてみれば、いずれ追いつかれるものだった。だが、これは違う。これは俺だけしか知らない。その力が自分に何をもたらすのか、自分はそれをどう扱うべきなのか、そのことに関してあえて深く考える思慮の深さは、残念ながらその時の俺にはなかった。

数年前までは「平凡」で一括りにされていた自分が、凡庸だった自分が、ファンタジーな世界で他者から一線をなす力を手に入れた。その高揚感に酔い、身を任せた。

笑わずにはいらなかった。

「ハハッ、ハハハハハハハハ圧倒的じゃないか。

…ケティ。僕はレコン・キスタ（とギーシュ）をぶっ壊す!!」

その日以降、毎日添い寝に来ていたケティがしばらく来なくなっ
た。

【03話】 地球離れ

気付いたら精神年齢30歳を当に超えている事実。どうも、こちらウィレム、9歳。今巷で話題の「10歳未満なのにトライアングル」。

魔法×科学〃無限大に気付いてから約1年半ほど、秘密の魔法特訓は目下進行中。

目標は10歳までに魔法関連は一通りけりをつけること。つまり、スクウェアになる。少し躓くこともあったがこの目標は達成可能圈内である。

それを意識すると、あまり調子に乗るのは良くないと自分を戒めつつも、どうにも気が大きくなってしまふ。

すると、現金にもそろそろ原作との折り合いをどうしていくべきかなどということも気になりだした。

確かタルプの戦闘でルイズが覚醒するからあれば必要イベントということだけれども、人が死ぬのを放っておくのも気が引ける……などと考えている時にはつとした。

この時代をまるで戦略シミュレーションゲーム感覚で捉えている。自分の決断が多くの実際の多くの命に関わるのに……と考えてまたはつとする。

何それ、何様のつもりだよと思う自分もいれば、いや俺はそういう存在だし？と開き直って悦に浸っている自分もいる。

この選択を間違っってはならないという思いに潰れそうな自分もいる。

この立場に混在する居心地の良さと悪さが複雑に絡み合い、なん

とも気味が悪かった。

ただ、自分の行動次第で絶対に死ぬとまでは言わなくても死ぬ確率が格段に上がってしまう人達が確かにいて、全ての命を救うなんてことはできない。そしてなにより、行動を起こすなら人を殺すことになる可能性も高い。

俺が殺す？

つまりこの頃の俺は

- ・ 基本的に原作が正当な流れと感じるステレオタイプ。
- ・ 静観を決め込むことは、多くの生きている命を見捨てることになる事実。
- ・ 行動の結果、自分が世界に影響を与えることに、もっと厳密に言えば悪影響を与えてしまう可能性。
- ・ 日本人として養われた、価値観、人生観。
- ・ 原作知識を持ち、読書的な立場からハルケゲニアを見えることで「ここ」に感じる距離感、とそのことへの禁忌感。

うまく説明できないが、こういったものがうずまき、安定していない状態だった。

矛盾する感情や考えが自分の中に、何度も浮かんでは消え浮かんでは消えた。

結局、自分が良かれと思うことをすればよいという結論に至るものの、何が良かれなのかわからなかった。

そんなかんだで思考の袋小路におちいった頃、領地の辺境で山賊が暴れているという情報が入った。

メイジも複数いるとのことで、父が自ら山賊退治に向かうこととなり、俺もついていくことになった。

母は早すぎると反対したのだが、父が珍しく母に折れず、

「お前も将来、このラ・ロッタを継ぐ身だから知っておいた方が
良い。」

の一言で俺もついていくことが決定した。

「お前は今回加勢しないでいいからな。」

父が、今の俺が戦場では使い物にならなくなっているのは
明白で、俺もそう思っていたし、事実そうだった。

結論を先に言っておこう、俺はこの山賊退治を通じて3つのこと
を学んだ…平民と戦場と自分だ。

かなり領地の端まで歩兵を含む軍で進出したため、片道だけで3
日ほどかかったのだが、その際に寄った農村の人々は本当に卑屈だ
った。

ひたすら頭を下げるのだ。

散策中に見かけたあきらかに貧しい者たちの中には、目に生きる
希望というか、力がこもっていない者もいた。

無論日本に育ち、転生後も領主の息子としてぬくぬくと育った俺
にとっては初めての人種で、目の当たりにするとかかなりショックだ
った。

そして、それを良い悪いは抜きにして、『そういうもの』として
捉えている周囲の人達も……父も含め。

父は人柄も良く、比較的善政を行っているとは思っているし、城

のお膝元の城下町は活気にあふれていて、貴族と平民の差は原作程ではないのではないか？とすら思っていた。

だが、その認識は甘かったらしい。

少なくとも途中によった村全ての平民に貴族への恐怖、自分たちへの惨めさなどが俺には見受けられ、それは『極々普通』のことだった。

この時俺は、将来善政しようとか今から内政チートもありかなと
か思ったが、それ以上に例の魔法を広める危険性を感じた。

いざとなったら仲良い信頼のおける人達になら良いかな程度には
思っていた。秘密はばらした時点で秘密ではなくなるのは承知で。
信頼できる人も、いざという時に仲良い信頼のおける人達なら、
と教えるだろう、命を救うために。

さすがに、それをするとは言えない。

しかしその結果例の魔法が広まると、貴族と平民の格差は広まる。
平民はますます貴族を恐れ、貴族は増長し、平民を人として見なく
なる

このように世界の常識を体験しショックを受けていたのだが、そ
んなことは関係ないとかかりに時の流れは残酷で俺に猶予をくれな
かった。

最低限の覚悟もできないまま、俺は戦場にさらされた。

父の一声で始まった討伐戦。

槍が腹にささり、剣で腕が飛ぶ。

馬に踏まれ、苦悶しているところに首に槍が刺さる。

魔法で人が飛ばされ、焼かれ、引き裂かれる。
敵も味方も次々に死んでいく。

血の匂いが、排泄物的な臓物の匂いが、肉の焼ける匂いが鼻を蹂躪する。

刺された者の絶叫が、死ぬ前の嗚咽が、最後の恨み言が、自分たちを殺そうと叫ぶ声が、耳の中頭の中で暴れまわる。

限界だった。俺は目をそらし、耳もふさごうとした。

「加勢しなくて良いとは言った！が目をそらして良いとは言っていない。」

喧騒な戦場にも関わらず、父が比較的小さく言った一言は俺の耳に響いた。

そう言われても無理なものは無理！と叫びたかったが、父に、私の手を煩わせ戦況を不利にするのか的のことを言われ、目を背けるわけにはいかなかった。実際、見なくてはいけないこともわかっていて。

父の放った魔法で人が次々に死んでいく。

父の一言で部隊が突撃する。

その突撃する部隊の先頭で剣を振るう人は知っていた。豪快で気さくな人だった。平民なのに貴族の間でも敬遠されがちな俺に声をかけ、

「子息様、すげえんだってな。頼むぜ、ラ・ロッタを良くして、俺たちに楽させてくれや！」

などと、笑っていた人。そんな人も、人を一人切り二人切り…五

人切った所で敵メイジの風で左腕を飛ばされた。

なのに彼は逃げない、それどころかメイジに突っ込み、肉迫しエアニードルで腹を貫かれた。

絶句している俺の視界の中、彼は最後の力で油断したメイジの首を刈り取り、崩れ落ちた。

遠くでよく見えないが、なんとなく彼は笑っている気がした。

勇敢で壮絶で あっけない最後だった。

彼が死んでも、戦場の時は止まらない。要だったであろうメイジがやられ、浮き足立つ賊に、後続の者が突っ込み賊は瓦解していった。

何度も吐きつつも、少しでも役に立とうと思ったまま、でも結局動けない俺をおいて討伐戦は終了した。

賊：100名ほど内メイジ4人。ほぼ、全滅。

軍：500名ほど、内メイジ10人。平民50人程死亡、メイジ被害なし。

俺の知人を犠牲に出した賊退治は、敵にメイジ4人がいたことも考えれば、皮肉にも「これ以上望めない」戦果だった。

後日、その死んだ彼の墓の前で、父と出くわした。

「知り合いと聞いていたのだな。ここにいると思った。母さんとケティが心配していたぞ。」

「…そうですか」

「…悲しいか？」

「…そうですね、悲しいです。ただ、それ以上に自分が情けない。そして、それ以上に、怖いのだと、思うんです」

「怖い、か」

「ええ、…たくさんの命がなくなりました。味方も…敵も」

この時の俺の気持ちをどう理解したのかはわからないが。父はなんともいえない笑みを浮かべた。

「そうだな。私の命令で、多くの命を奪い、散らさせ、私自身も手を下した。それは紛れもない事実で私の業だ。」

だが、逃げることはできない。業と、業を犯すことから。」

「僕はわかりません…どうすればいいのか」

「このような類のことは、自分の所為で誰かが死ぬだのどうだだのと悩みすぎるものではないぞ。正解などないのだから。」

かわりに、誠意と覚悟、だな。わからないなりに自分最善だと信じて決めたことを全力で取り組む誠意。

そして、そのことでどんな結果が生じても、仮に誰かを死に至りしめても、それに真っ向から顔を付き合わせる覚悟をもつことだ。」

「誠意と覚悟…」

俺にこれが足りていないのは、自分でもわかった。

「それにな、悩むだけで決断しないというのは、裏を返せば、要するに逃げてるだけだ。」

悩むのももちろん重要なことだ、それは優しさ故のものだからなだが、それだけではダメだ。覚悟がない証拠だ。」

「…そうですね。覚悟を決めて、しなければいけないんですね、決断を。」

「そうだ。ただ、決断は自分に正直にすれば良い。筋を通しつつ主観的に、が私的にはベストだ。」

これには少し驚いた。

「そうなんですか？客観的、公平であるべきでは？」

「もちろんそれができたら素晴らしい。素晴らしいが、それは神の所行だ。私は人間なんでな、多分公平に判断することはないな。」

極端な例を挙げれば、全く知らない子供とウィレムで本当に2択しかできないのなら私は100%お前を選ぶ、仮に子供が10人でもだ。

申し訳ないがね。

私は大事にしたいものを大事にするし、愛しい人を守りたいと思う。」

まっこうから言われると少し恥ずかしい。が、悪い気はしなかった。普段口数が少ない父がこのようなことを言うてくれることは珍しいのだ。

「それだけだと横暴になりうるから筋を通す、ですか？」

「そうだ。私は領主として、人として、男としての筋は通す。」

なんとなくわかるし、格好いい生き方だ。ただ、救いがないなと思った。

「そして、業を負い続けるのですか？」

「そうだ。ただな、ここに眠る彼が兵に志願したのも、賊退治に参加したのも、最後まで逃げずに勇敢に戦ったのも全て彼の行動で彼の人生だ。

私が彼を殺したというのは、正直負いすぎだし逆に彼に失礼だ、彼は彼の思う生き方を選び、実行しそれに準じた。立派な人生だった。

まあ、賊に関しては、言い訳もできん。私が彼らを殺した。ただな、ここはお互いの大事なものが、幸せが、生死すら対立しあう世界だ。

自分の中の優先順位を違えるな。陳腐な言葉だが、迷うな。」

「…なんだか生きるって大変ですね。」

「そうだ、辛くて大変で、だがそれ以上に素晴らしい。私だって、領主の責任に潰れそうな時はある。

だけど、私には、妻がいる、ケティがいる、お前がいる。家族を、領民を守りたい。

それだけで私はがんばれる。いくらでも業でも負うさ…だから、最後に、お前には私たち家族がいることを忘れるな。

私たちはいつだってお前の味方だ。」

「はは、そうですね」

思わず笑ってしまった。すごく当たり前のことだ。

ただこれだけが、遠くを見ようとしすぎて近くが見れていない自分を引き戻してくれた。遠くのは所詮、遠いのだ。

大丈夫そうだなという笑みを浮かべ、背を向ける父に向けて言った。

「ありがとうございます、父さん」

「おお、息子が思っていたより普通で、思っていたより男の子で良かったよ」

「どう意味ですか？」

「お前が悩んでいるはわかっていたからな。お前の悩みというから何事かと思えば…」

なに、一人前の男になる前にありがちな、割りと平凡な悩みだったてことさ。」

笑みを浮かべ、ポンっと手を頭においた父の手は大きくて、暖かった。

久々に、いや初めてかもしれない、父と手を繋いで帰った。大きくて、強い父が誇らしかった。

「あなた、どこいったの！？仕事をほったらかして！！」

と帰った父が、母に首根っこを掴まれて後ろ向きに引きずられ、なんとも情けない顔を浮かべながらドアに消えていくのを見るまでは。

「父さん、あなたは覚悟が足りなかったのですね…」

でも、父との会話で俺の心は吹っ切れた。

今までの俺は、変な使命感とか、基本的に原作に沿いつつベターな結果を出し続けるべきだというステレオタイプとか、ちよっと特殊な立場とかに囚われ、勘違いしていた。

俺の立ち位置はメシアとかヒーローとかそんなものではない。ハルケゲニアに生きる一人間。

ラ・ロツタの独り息子。ハルケゲニアの一貴族。ちよっと有望のな。単にそれだけだ。

だから、俺は俺の主観で動けばいいと割り切った。

だから家族を自分の大切なものを何より優先する、それでいい。そういう視点で見ると、まだ会ってもいない人達を救うのに命を賭けたりするのは不自然に思えた。

せいぜい、戦争とかの被害が減る方向に持っていけるようなら持つて行けば十分だと思う。

父風に言えば、俺は救えたかもしれない世界の数多の命より、自分と家族を優先したという過去と一生向き合っただ。

まあ、当たり前のことだと思う。

日本で生きていたときも世界の生きるのも困難な貧しい人々を財を投げ出して助けるなど、しなかったのだから。

方針は決まった。

・何事よりも大事なものの、家族優先

・この時代が『物語』などを産むことなく、比較的平和な時代だった、とくくれるように「ハルケゲニアの一人間」として動くことと
・この世界で人を殺める覚悟すること

具体的には

？ラ・ロツタの安全と発展

家族と仲良く、できたら内政チート？

？アンドバリエ？の指輪

死人とか人の精神を動かしていた気がする。個人的に嫌悪。

これがなくても反乱が起きるなら、仮にガリアの干渉が多少あったとしても起こるべくして起きたって感じたよね。

「「「越えられぬ壁」」」

？気が向けば、その他不運な人達を助けたり？

いざ蓋を開けてみると、思っていた以上にやるべきことがなかった。びつくりした。

仮に『物語』をなくせたとして、サイトという同郷の少年はこのことを知ったらどう思うのだろうか？

英雄になれなかったと悔やむのか、大量殺人をせずにすんだとほっとするのか？ということが、少しだけ気になった。

まあ意味のないことだな、と思い直した時、何故か少し笑みがこぼれた。

その晩のケティタイム

「あにさま、げんきになって良かった！！」

ケティは今日も元気にかわいいです。

「心配かけてごめん、でもありがとう」

くしゃくしゃと頭を撫でる。少し目を細めて猫のように大人しく撫でられるケティはのかわいさは反則級。否、反則だ。

「ケティ、兄さんはケティによってくるあらゆる魔の手から守って決めたんだ。」

「あにさま、ありがとう！じゃあ、わたしもあにさまを守るね！」

「ッ」

はっとさせられた。まだまだ無邪気な子供の笑顔、でも今日の笑顔からは少し成長の足音が聞こえてくる。

「ニパ〜」から「にこっ」になりつつ笑顔。少しだけ大人になった笑顔。そんな妹の変化は少し寂しいが、とても喜ばしいことだろう。

それに、ふんわりと微笑む包容力のあるケティ…すごい。

「ケティ、兄さんはケティによってくるあらゆる魔の手から守るから！！」

大事なことなので2回言っというた。

【04話】 幼少期のあれこれ前編

|||||魔法特訓1|||||

基本的にチートの分子解釈に基づく魔法だが、落とし穴が全くなかったわけではない。その一つが「火」だ。

母のファイアーボールは確かに、空气中で燃えているように見える。が燃えていなかった。

「燃える」って連鎖的に広がる激しい「酸化」のはずだろ…
だが、魔法の火は基本的に何も「酸化」していなかったのだ。

これは結構困った。最初、意味がわからなかった。不思議に思っているせいか、魔法も成功しなかった。

数週間悩んだ後、あるこじ付けを行った。

火の本質は、酸化ではない。化学反応の余剰エネルギーが熱と光として放出されたもの。つまり、熱と光のエネルギー。

未だ何故これでうまくいくのかわからないが、火が扱えるようになったので、その後の思考は放棄している。

ちなみに最終的には熱エネルギーだけの見えない火も扱えるようになったって、俺の切り札の一つになっている。詠唱は一緒だからチート技。

|||||オリジナル魔法1|||||

ディテクト・マジックを普通のものに行ったところあまり意味が

なかった。精神力がかかっているかない普通の物体とわかる程度。

これは俺からしてみればおかしいことだった、魔法がらみとはいえない実際の分子の様子などがわかったのだから理論的にはわかりそうなものだ。

至極自然にディテクト・「マジック」のマジックが余分だと予想し、ディテクトとだけ唱えたら成功した。

拍子抜けするほどあっさりだったが、何気に初オリジナル魔法だったのでうれしかった。

これで解析の対象が一気に増えたので、その代表例を紹介
本：紙の構造のみ

植物：光合成ですね。わかります。

薬草：構造はわかるが、特に薬草効能はわからなかった。

家など：材料とか頑丈さも相対的にはわかったけど、どのくらいの衝撃に耐えられるかみたいのはわからなかった。

マジックアイテム：精神力がかかっているのはわかるけど、どのような効果があるかは不明。ディテクトマジックでも同様。

一番気になったのはやはり、人や動物にかけるとどうなるか、だった。

なんとなくいやな予想がつき、怖かったので城下町にいた野良の子犬で試験を行った。

かけた瞬間に、もの凄い情報が脳に入ってきた。その野良の肉体的構造や状態・記憶・感情……

あっさり俺の頭はオーバーヒートして倒れ、ケティと母に泣かせてしまった。

結論としては動物にかけるとはご法度。頭がもたない。

小さい子犬であれだったのだから、人などにかけたら自分が死ぬと予想でき、試す勇気などあるわけない。

そのものの構造はわかるけど、他のものへの反応・効果はわからないので期待したほどでもなかった。

まあ、将来研究者になるなら重宝しそうだ。

後に、錬金の知識集めとして使えることに気づき、狂喜乱舞した。

この世界の「理解の少ない人」が動物や人にディテクトするとどうなるか気になったけど、誰かに話して試すつもりはない。

〓〓〓魔法訓練2〓〓〓

次にてこずったのが、同系統の組み合わせ。火×火とか風×風とか。厳密にいうと、分子にさせたいことが同じものの時の掛け合わせ。

例えば、母のラインの火の魔法はドットに比べて威力が格段に上がっていた。単なる2倍ではなく、もっと相乗的なものだった。

これを見た時、俺は困った。いや、既に全力で分子振動とかエネルギー発生させてるし？と。これ以上を想像するのは少し無理だった。

火に火をかけて一気に威力アップはわかりやすい。事実、このイメージの方が先にラインスペルを成功させている。

だが、俺流解釈でラインの魔法を行ってもドットとあまり威力はかわらなかった。精神力がもっていかれる割に。

…これは本当に困った。解決に数ヶ月かった。途中で同系統でライン以上はあきらめようかと思った程だ。

そして、解決した今でも結構苦労している。解決法がイマイチなのかもしれない、ある意味ただの根性論なのだから。

説明しにくいのだが、俺がおこなったのは意識をわけることだっ

た。

全力で分子振動などを想像しながら、もう一つの意識でそれを当たり前とみなす、全然普通のものだと思ひ込む。

そして、その全然普通と思っている意識の方でもう一回全力で分子振動などをさせる想像をする。

別系統では自然にこうしているわけだし、意識を複数別々にもち、掛け合わせるのがライン以降のコツだという結論になっている。

のだが、本当に難しい。

トライアングルになるとなると大変だ。

1つ目の意識で全力、2つ目でそれを普通と認識、その後全力、3つ目でそれを普通とみなし…となるころには1つ目の意識で全力というのがどうしてもおろそかになるのだ。

まあ、大変なイメージに見合う威力を得られるのだが。スクウェアとか恐ろしすぎる。

||||| オリジナル魔法2 |||||

系統魔法のオリジナル魔法は意外と難航、というかほぼ無理という結論に。

1番のネックはルーンの例が少なすぎ、自由に詠唱を作れないことだった。

これまでの経験から、魔法に必要な要素は多分精神力（源）と想像（造形）と詠唱（実現）だと推測している。

科学知識を使うことで、想像の部分で威力調整やアレンジはできるにはできるのだが、アレンジの領域を出るものではなかった。

作れたオリジナルといっても、トライアングル版のファイアーアローとかその程度。多分使っている人はこの世界にはいくらでもいる。

|||||内政チート…?|||||

内政チートは妄想以下、想像以下だった。

雑学マニアでもない俺はwikipedia無でチートできるほどの知識を持ち合わせていなかったも原因。後、ハルケゲニアの文化なめてた。

?政治

そもそも、領土のスペックがそこまで詳細に把握されてなかったじゃあ、調べるよとも思うが、国土調査つてもものすごい人手と資金が必要で、それをもとに政策をしてもおそらくすぐには結果は出ない。

長期的に見ればよいことはわかっているが、それでも余裕はないそう。

また、外交で情報を制したものが勝つてことがわかっていても、それを十分に行う元手がない。

それに、腕利きで信頼できる人材など都合よく転がってはいなかった。

一応、あてはある。それにこの要素は原作から離れるならば、絶対に必要な要素だと思う。

税制に累進課税制度を使ってみることを進言した。

これを財務担当達に説明することになり、簡単に説明を行ったところ「収入で勝るのに、実際の取得が少なくなる人がいたら不公平では」という意見を言うものがいた。

感激した。

この世界の人はこういつてはなんだが、俺からしてみれば物足りない人が多い。理論的に考えて、がずいぶんと苦手なのだ。

魔法があるから仕方ないかなとも思うが。

何が何をもたらすのかを考えることがない、できないというよりはする習慣がない。

だから、本当に感激した。彼はきっと才能がある。

うれしさのあまり彼を重用するように父に進言し、彼に数学をかつまんで教えた。

関数と微分、単調増加の性質を説明し、どのように税を設定すれば良いか鼻高々に語った。無論理解されなかった。

これも国土調査が進んでないので無理かと思えたが、自己申告制と虚言の罪を重くすることで実施された。

脱税に対する恐怖感を煽るために、最初少にしか出来レースを行ったりはした。

まあ、これで飢え死にしてしまう人が少しでも減ればいいと思う。

？農業

輪作ぐらいしか、知識なし。

あたかも自分が思いついたようにそれらしく説明しといた。半信半疑だったけど試験実施中。

効果があるのが数年単位、いや常識的に考えて十数年単位だから思っていたほどは速くは広まらない。

？工業

流れ生産の概念と魔法でウマーと思っていた。

その説明を父にしたら、

「聞かなかったことにする。」

と言われた。納得いかなかったので食いついたら説教を食らった。

正直驚いた。

要約すると、

貴族の役割は領民の生活を統治し、守ること。決して自ら金を稼ぐことではない。

そもそもそれってほぼ平民対象だよ。平民の使うものをメイジが魔法を使ってまで作るっておかしくね？俺らは彼らの便利屋さんなの？

魔法は神聖なる始祖ブリミルの恩恵、それを大々的にそのような利用をすれば、魔法の品位を下げたして異端認定を受ける。

そもそもそんな考えがおかしい。

正直頭を抱えた。

人格者で器が広いと認める父がこう思うのだから、ハルケゲニアで少なくともトリステインで魔法を手段とした産業発展は基本的にNGなのだ。

魔法で、運河作るとかがギリセーフのラインらしい。

じゃあ、アカデミーなんてなんであるんだよ！と思ったら、行われているのは秘薬の生成・研究とか魔法の研究とかそういうものらしい。

工業用途はとにかくNGだった。ゲルマニアならOKっぽい。

ちなみにこの時、秘薬は希少性と高値を保つことでその効果ゆえに逆に魔法の神聖性を上げる役割を果たしているから製品として許されている、と気づいた。

便利ではなくありがたや、なのだ。

秘薬精製にかかる費用は本当は価格より遥かに低いと予想される。

6千年もあるのに科学や産業が発展しないわけである。

いくら魔法があるからって6千年で低い文明レベルというのは納得していなかったのだが…

魔法が神聖視化される弊害、ここに極まれり、である。使えるものは使うつていう精神も生まれない。

しかも、富、即ち知識を得れる立場にいるのが魔法至高主義のメ
イジ…

科学を育てるのに必要な、才能・好奇心（猜疑心）・教養の3つが揃うことがこの世界ではまずありえない。

その相乗効果なんていわんや、である。

平民に流れ作業があるよ、というのを教えるに留まった。父が偉く非協力的だったのだ……。

しかし、このことを後に感謝する。

産業の発展の危険性に気づいたのだ。産業が発達すれば、科学も一緒に発達してしまう。

すると一見平民との格差が減るようで、魔法の優位性と危険性が増大すると思われた。

数多あるファンタジー v s 科学の主題ではあるが、基本的にファンタジーな世界が『科学に対して無知』だからこそ、科学は魔法に対して優位・同格にすぎないのだ。

系統魔法でさえ、物理現象を操れる。科学など発展してみろ。「物理現象」をある程度自由に操れるメイジと平民の差は天と地程の差になるう。

曖昧な科学知識の俺でさえ十分チートなんだ。物理現象を完全把握したメイジなど恐ろしすぎる。

原子爆弾の父、オッペンハイマーのような苦悩は正直勘弁である。原則的に急激な産業発展、特に大々的なものは戒めた。

？商業

特にできることがなかった。0の概念と10進法はさすがに既に広まっていた。

そこで、実用に使えるような確率とか期待値とかを中心に数学を教えなかったけど、時間とあんまり訝しがられるのもヤダだったので断念。

その他、普段の生活で合理化できると思ったことはちよくちよく口にしたいけど、プリミル教は結構手ごわく、思うような成果は出なかった。

そして、前述の理由で途中から「啓蒙」を放棄した。

||||| 原作崩壊？ |||||

11歳の時、ド・モンモランシー家のパーティーに参加した。待ちわび、待ちわびた瞬間だった。

でも本当に良かった。モンモランシー家はまだ、交渉役らしい。多分、交渉失敗は指輪が奪われた後じゃね？常識的に考えて、思っていたので間に合ったはず。

パーティーで同年代のモンモランシーの紹介を受けるのは自然な流れだった。

「紹介します。これが、ウィレム。私の自慢の息子です。」

「ご高名は常々、なんでも幼くしてトライアングルの凄腕メイジだとか。これがモンモランシー。私のかわいい愛娘です。」

覚悟を決めろ、今日の俺は小さな姫様と月夜に城外に抜け出す、ナイトになるんだ！！

「はじめまして、リトルレディ。わたくしはウィレム、ウィレム・ド・ラ・ロッタと申します。」

今宵、貴女との出会いをお導きになったブリミルに感謝を。」

「ブツツ…いや、失礼」と噴出した父のせいで台無しだった。

それから同年代同士で喋りなさいと、父たちは離れていった。さあ、ここからが本番だ。

「トライアングルなんて凄いわね、わたしはまだドット…何かコツでもあるのかしら？」

「僕もまだまだだよ。コツはそうだな、強くイメージすることかな？」

「強く？」

「そ、強く。具体的に自分が何をしたいのか思い描きそれを現実にぶつける感じ、かな」

「そう。そしたら、私もラインやトライアングルになれるかしら？」

「それは、君次第。まあ、メイジのランクは一つの指標にすぎないよ。」

例えば…ド・モンモランシ家は水の精霊と盟約というすばらし

いことを務めている。水の精霊と話したりできるんだろ？」

「ええ、わたしもこの前、精霊様に会ったわ」

「へえ、それは凄いな。僕にはできないことだ。その、君一人で水の精霊と話せるのかい？」

「え、ええ。やったことはないけどおそらく。モンモランシ家の血を精霊様は覚えていらっしやるから。」

心の中で大きくガツポーズした。

（フハハハハ、条件は全てクリアされた！！後はモンモン嬢をその気にさせるだけだ。）

？「子供」のモンモランシーが水の精霊を呼べる

？俺がこの時までにとっそりスクウェアになっている。

アンドバリの指輪が危ないと言った所で、モンモランシ家の大人達を説得するだけの情報をもっていないし、そもそも信頼されていない。

逆に怪しまれる。

といって、水の精霊を見たいなんて我俣も通じるわけがない。

そう、相手が大人ならば。

だけど、子供同士の秘密のいたずら、なら大きく話はかわってくる。

子供のモンモランシーにモンモランシ家としての確固たる責任を求めるのは酷であろう。

後は、こちらがカードをもっていれば良い。モンモランシーが大きく興味を引かれ、秘密の交換として精霊を呼びたくなるような。

それが、スクウェア。厳密にはスクウェアの呪文。モンモランシ

家に今スクウェアがないのは調査済（父に聞いただけ）である。

非常に簡単な流れだった。

秘密だよといって、スクウェアであることをばらせば、モンモンは魔法が見たいと言う。

じゃあ、僕も精霊が見たい。お互いこっそり秘密を見せっこしようと言えば、この可愛らしい少女は簡単に堕ちた。

ちょっと二人で仲良く出かけるふりをして、フェイス・チェンジ百面相を見せてモンモランシーを喜ばせ、速攻でラグドリアン湖に向かった。

早速、モンモランシーに精霊を呼んでもらう。水面が盛り上がった人の造形になった時は少し怖かった。

「単なるものよ。貴様の体を流れる液体を、我は覚えている。貴様に最後に会ってから、月が4回交差した。どのような用で参った。」

えっと…とつまるモンモランシーを押しつけ前に出る。

「お会いできて光栄でございます。水の精霊様。私の名はウィラム・ド・ラ・ロッタ。クリスティア・ド・ラ・ロッタ伯爵が息子にございます。」

本日は精霊様にお願いしてきことがあつて彼女にお目通りの計らいを頼みました。」

「申すが良い。単なるものよ。」

「精霊様の至宝。アンドバリの指輪についてでございます。」

「我が秘宝、何故単なるものの汝が知っておる」

水の精霊は最初から少し喧嘩腰だった。

「情報の出自に関しては目をお瞑りください。ただ、精霊様の指輪を狙っている輩がおります。

ですので、指輪の守りを強化、本当に絶対とられない様に強化してもらいたいのです。」

「我は今でも十分にしっかりと守っておる、単なるものごときに口出しされることではない」

正直…予想外だった。ちゃんと嚴重に守ってね 相わかったでハッピークースではないの？

これで話が終わってしまったら意味がないと思い、必死に考えた。あれ？実際どうやってアンドバリの指輪を盗んだんだ？スクウェアメイジでも普通に無理だろ。精霊が守っているのだから。

そもそもどこにあるかわからないし…千里眼でもないし…そういうマジックアイテム？ああ、ミヨズニトニルンか。

「我々人ごときでは精霊様には適わぬことは存じ上げております。ただ、その一派に、神の頭脳が絡んでいる可能性が」

精霊の雰囲気が変わったのがわかった。

人間風情がっから、こやつ怪しい…といった風に。

「…もう一度問おう。その情報を如何に入手した。」

「その、とある伝からとしか…」

「単なるものよ。汝の情報、興味深かった。覚えておこう。しかし、信用できん。」

これはどうなんだろう。成功で良い気もする。

でも、これは手を打とうとアンドバリに近づいた時を狙っているなどと思ってる可能性もあるわけだよな。

それだと意味がないどころか逆効果。

最終手段として心を読んでもらうつてのもあるんだけど、「原作知識有の転生者とはなんというこの世の異端者 殺す」の流れにならないという保証がない。

ここで死ぬのは無しだ。旅立つ準備など全くしていない。だけど…

だけど、ここは一つの分岐点だとふいに感じた。

こんなファンタジーな世界1回や2回、綱渡りが必要な時があるだろう。

そして、それは今なんだ、と思った、思い込んで最後のカードを切った。

「精霊様、信用してもらえなければ困ります。そこまでおっしゃるのなら私の心を読んでもらってかまいません。」

ただ、もし私の最後の時となるならば、その際には別れの猶予をお願いいたします。」

結果、信じてもらえた。

さすがに精霊もどんなマジックアイテムでくるかわからなかったらしく、アンドバリの指輪の力そのものを封印してさらに、精霊にとって少しの間、精霊自身すら近寄れないような結界に封印するら

しい。

さすがに、大丈夫だと思う。

原作知識に関しては「もうほとんど意味のないものになった、であらう?」と言われた。

やっとのこと感謝されたので、対価として「ある人の精神を治してもらう」ことをお願いした。

今は、見殺しにする贖罪として。

「なんだったの?」

というモンモランシーへの返答に正直困った。仕方ないのでナイトのノリで押し切った。

「実は、始祖ブリミルから天啓を受けてね、それを果たしに。これも僕とモンモラシーだけの秘密だよ」

「魔法特訓3」

偏在が使えない。使える人が回りにいないし、理論的に不可能だろ?何が起きてる?と思っているからかできる兆しがなかった。

有用性がものすごく高いのであきらめていないが...

ワルドとかどうやってるんだろ?...深く考えず、自分がもう一人!って思い込むのかな...

「初めての...」

人の命を奪ったのは12歳の時だった。また賊が現れ、それを退治しにいった時。

いざという時は人を殺す、という覚悟は持っていたはずだったが、そんなものは現実を知らない子供のただの付け焼刃。

いざ、戦場に出た俺はやはりただの役立たずだった。自分が情けないか思いつつも、結局動けないままだった。

ただ、今回の先頭は戦線が俺まで近づいてきた。敵が振った剣から飛ぶ血が俺にまで届く。

父の「逃げる」という声が聞こえる。

他人の死も自分の死もすぐ手の届くところに感じられた。

俺の緊張とパニックは絶頂を迎え、走馬灯を見た。

過去の地球での生活、一転波乱万丈の転生、初めての戦場、自分の命と引き換えにメイジをつった知人、そしてケティ達家族…

「うわああああファイアーボールウウウ」

気づくとドットとはいえ、真正正銘の全力の魔法をぶつけていた。例の魔法の隠匿とかは全く考える余裕がなかった。

掛け声とともに俺の真上から前方に打ち下ろされたファイアーボールは敵の密集地帯に落ち、瞬く間に周囲の賊達を炭と化した。

轟音とその威力に一瞬だけ戦場が止まった。

俺は正直何がなんだかわからない状態だった。やってしまったとは思った。

ただこの時は、殺人を犯す前と犯した後で決定的に自分の中の何かが変わってしまったような感じはしなかった。

思考はグルグルとまわってよくわからないし、過剰に分泌されたアドレナリンのせいか異常にハイテンションだったのだと思う。

そのまま勢いのまま静まり返る戦場に俺は言った。

「今のはメラゾーマではない…メラだ。」

俺のイミフな発言をどうとったのかは知らないが、賊は勝ちは無
か、逃亡も適わぬと悟ったらしく全員投降した。

そして、詰問を逃れられぬと思った俺は、戦場の肉を啄ばみにき
たのか運よくいたカラスに向けて、決死の覚悟でデイクトを唱え
た。

後は目が覚めた後に、こう言えば良い。

「悪魔かなんかにとりつかれそうになっただけ、なんとか追い払
った」

ファイアーボールにはありえない威力と意味不明な発言。

そして、その後苦しみながら（本当に死にそうだった）倒れたこ
とが裏づけとなって、このありえない嘘は受け入れられた。

「悪魔に打ち勝つなんてすごいね（わ）」と素直に感心する母と
ケティに申し訳なかった。

後日、こっそりとけじめとして戦場に墓をたてにいった。

そこにはファイアーボールの焦げ跡と、やけ残った骨があり、そ
れを見た瞬間、急に”殺人”を実感し、吐いた。

そしてしばらく食が細くなり、不眠にもおちいったが…それだけ、
それだけだった。安心したが、少し自分が悲しかった。

殺した賊たちはほとんど顔も名前もわからない。だから、殺した
事実だけは目を背けてはいけない、と父の言葉通りに思った。

【05話】 幼少期のあれこれ後編

||||| 鍛錬と試行錯誤 (@10歳) |||||

異世界とは未知の世界だ、魔法の世界ともなればそれはなおさらである。

原作知識をもとに、あれこれと試行錯誤するのは楽しくもあり、意外と大変なものであった。

チチツと小鳥がさえずる早朝、誰にもいない兵の鍛錬場。朝早く早くここで体を動かすのが俺の日課だ。

内容はストレッチ+軽い筋トレ+走る・跳ぶなどにかく身体を動かすこと、にとどめている。

身体がまだできあがっていないく、

・変に重たい真剣を振り回すと逆に身体を歪める可能性がある気がする？てかそもそも持てないし。

・過剰な筋肉トレーニングも身長が伸びるのを妨げる、気がするなどの理由で、本格的なものが行っていない。

確証があつたわけではないが、この世界での身は一つだ。また転生するかもしれないけど。

変な冒険はできないというのが、俺の正直な考えだった。

前述の通り、魔法を優先しているというのもある。

一通りの訓練を終えた後、軽く流しがらふと思いつく。

自分が速くなるイメージ、前に進むイメージをもちながらお試し

のコモンスペルを唱えてみる。

「ダッシュ」

・・・何も速くならない。俺の声のみ、寂しく鍛錬場に木霊する。だが、これは若干予想していた。今の所、ディテクト以外のオリジナル・コモンマジックは全て失敗に終わっている。

だが、これであきらめていたら、オリ主失格であろう。

新しい魔法が俺を待っている！！かもしれない。

自分を鼓舞し、走りながらさらに続ける。

「アクセレイト」

変わらない

「スピードアップ」

何も変わらない。

「ヘイスト」

若干息が上がってきた。

「瞬神！」

むしろ、つまずいた。段々やけになってくる。

「ラディカル！グッド、スピییییード！」

と、叫んだ後、鍛錬場の端にメイドのお姉さんを見つけた。顔が引きつっている。

ははは、見ていらっしやいました？俺も引きつった笑顔を向ける。

「あの・・・朝食の準備が」

わかりました、と言い走った。メイドさんから走り逃げた。

自分でもびつくりするくらい、速かった。

＝＝＝＝錬金術と武器生成＝＝＝＝

この世界の魔法の中でも、とりわけ有用性が高いのが錬金である。原子構成、分子構成、物体形状構成。これら全てを包括しているスーパー魔法なのだ。

地球知識持ちの俺が、それを用いて作ったのは、そう、銃などの近代兵器である。

特に、銃に関しては携帯性、連射性、威力の三つが適う物を求めて、何度も、何十回も、どこるか何千回と試した。

結論

1つの魔法がいる銃ができた。

複雑な構造でも、少しずつ作っていき、最後に「くっつける錬金」をすれば良い。

特徴

・銃身にスパイラルの溝をいれた。威力と命中率が上がった。
・リボルバー式。装填数は8。ベレッタ？などの銃の自動装填は俺の頭では無理だった。

・1番威力が出たのは、水素爆発（爆縮の際の反応エネルギー）の利用だったのでこれを採用

・水が燃料。水が入ったカートリッジを銃に差し入れ、これを錬金で水素と酸素にする。一度の錬金でリボルバーの装弾数分打てる。
・引き金を引くと火打ち意思から火花が出て、一発発射。

魔法無しの拳銃は作れなかった。ググレさえすれば…

撃鉄で発射するイメージだったのだが、よくよく考えると、弾の中の火薬って衝撃で爆発するものってこと？爆発しそう、危なくね？しかもそんな都合の良い火薬は見つからなかった。

ちなみに、重火器に関しては、そこまで本気でやらなかった。破壊の杖をディテクトすれば良いだろうと思っていたからだ。

ロケラン作り放題とかwwwちょwwwおまwwwうえwww固有結界「無限の銃製」wwwありえなすwww

|||||ケティと特訓と会話（@12歳）|||||

ケティと共有する時間、通称ケティタイムは至福の時がある。

このケティタイムが足りないとケティ分不足となり、禁断症状、通称ケティ欠乏症が出る…かもしれない。

シスコンで何が悪い。

ただ、最近のケティはスキップを少し恥ずかしがる時がある。10歳をすぎてからは一緒に寝ることもなくなった。

11歳：小5ぐらいか。確かに男女の違いを意識し始める頃かもしれない。

むしろ少し遅いぐらいかもしれない。だが、寂しいものは寂しい。俺の名誉のために言っておくが、ケティが嫌がることは絶対にしないし、しないのだ。

今、ケティはフライの練習中。

ちなみに俺のフライの理解は（レビテーションも同じ）

適度な圧力で高密度な空気の層で自分を空中で支えてあげること、少し違うけど水の中にいるようにする感じ。

後はその層を動かしたり追い風を作ったり、となっている。

応用としては高圧力、高密度な層を足裏に作ることで、空中ジャンプなんかもできる。

「あ、兄様、兄様……」

ケティが上から呼んでくる。見ると、空中であたふたとバランスを崩している。

フライの呪文を唱え、ずっとケティの前まで浮き、右手でケティの左手、左手で右手で掴んでケティを安定させる。

ダンスをするような体勢だ、これはおいしい。

「空中だからと言って不安になると、それがそのまま魔法に影響

するよ。空中で安定している様子を自信をもって想像して。

大丈夫。ケティならできる。」

「はい。」

「いい返事だ。じゃあ、離すよ。」

ケティの手を離し地面に降りる。今度のケティは空中に危なげなく浮いていた。

「お、良いね。じゃあ次のステップ。ちょっと前に進んでいくイメージをもって。もちろん安定したままね。」

すーとケティが前に進む。

「よしよし、良い感じ。じゃあ、一度降りてきて。」

ケティが少しゆっくり下がった所で、突然落ちる。それを受け止める。

今日の運勢は良いらしい。

「えへへ、最後に気を抜いちゃった。」

「でも、安定してたし、少し動けたね。よく出来ました。」

「えっと、兄様に大丈夫って言われると…なんだか安心して自信をもてたの。」

一応フライが成功し、少し昂揚したのか頬に赤みを帯びた状態で、少し照れた笑みでケティはこう言うのだ。

ケティ　なんて恐ろしい子なんだ。
兄殺しの異名を欲しいままにしている。

ここは、なでなでしたい所だがぐつと我慢する。

子供扱いするつとのこと、最近ちよつと不評なのだ。かわりに俺は提案する。

「この後は空中で自由に動く練習に、まずは空中ダンスでもしよ
うか。」

最初は僕がリードできるし、いざという時もそのまますぐに支
えられる。」

||||| 戦闘訓練と杖 |||||

12歳の誕生日を迎えた頃から、背も伸び、筋力も付いてきたの
で本格的に戦闘訓練を開始した。

それにあたり、杖について真面目に考えた。杖に形状的な制限、
数的な制限はない、はずである。

1つ目はもともと使っていた杖、人前ではこれを使う。所謂デコ
イ的存在。

2つ目に剣の杖を作った。

まずは王都に行き武器屋をまわり、ディテクトで情報収集を行っ
た。

デルフがいたので原作の武器屋だと思うのだが、日本刀らしきも
のがあった。さすが玉鋼、強度的も問題なかったので迷わずこれに
決めた。

本当はディテクト 錬金ですますつもりだったが、この剣に愛着が湧き、購入したくなったので買った。デルフと一緒に。

原作に沿わせようとして結果、デルフを得れなくなるようなリスクは無論犯さない。

そして、右の中指と、一応念のため左足の中指にも指輪をして杖とした。

1つの杖？の契約に1週間程かったので、合計で3週間ほどかかったが得れた効果はそれ以上だと思う。

てか、なんで、誰もやらないんだろう？いや、わかっている。それが貴族の常識で、あり方だから。
げに恐ろしきブリミル教。

戦闘訓練の内容は剣を習得するための目的とした魔法無し訓練と実践向けの魔法を取り入れた戦闘の訓練だ。

前者は城に務める平民兵の隊長さんにお世話になった。

ちなみに彼も日本刀の扱いなど知らず、独学が決定。軽く後悔したが、契約してしまった後だったし、愛着は消えなかったのでよしとした。

おそらく最終的にはほとんど銃を使うという思いもあった。

それでも剣の筋はいい、と言われている。オフレコだがメイジなのがもったいないぐらい、ではあるそうだ。

まだ、筋力の差から打ち勝つことは出来ない。

だが、基礎トレーニングで鍛えたバネを生かした瞬発力、反射神経とストレッチを続けた柔軟性を活かした回避力には目を見張るものがある、らしい。

魔法学院入学前には隊長さんと五分をはれるようにはなり、後は

経験・筋力で一流になれるという太鼓判をもらった。

自分でもある程度の自信はついている、主人公補正おいしいです。

後者に関しては独り相撲だった。

メイジはメイジなので魔法の能力を上げることが最大重要課題で、戦闘訓練は、はやらない。

魔法衛視隊におかかれた子供達が”ごっこ”をするくらいであるう。

おかげでラ・ロツタに、魔法戦闘訓練の師事を仰げる人はいないし、適した練習相手もいなかったなので独り、仮想トレーニングが主だった。

相手を想像する。

エアカッターを打つがそれを敵は交わす。

それに合わせ、自分が飛び出し、一合剣を合わせるが、すぐにひく。その瞬間にエアカッターがブーメラン的に戻ってきて切り裂く。みたいな。

…虚しい。

補足として、ガンダールプは本当にメイジ殺しだろうということに気づいた。

速さ特化はメイジにとって非常にやっかいだ。

範囲が狭い、低次の魔法はかわされる。

ちなみに対平民として最強と予想していたレビテーションも高速で動く相手には利きにくい。

イメージを固定しにくくなってしまるのが原因だ。俺流でも対象に速く動かれると、空気層で相手を包むの苦労する。

そして、範囲が広い高次の魔法を打とうとするとその前にやられる。

そもそも、防御力などないに等しいメイジにとって、本当に恐れ

るべきは、マツチヨで明らかに強そうな人ではなく、身軽で俊敏な盗賊系の者たちだ。

後は空中戦の練習。

フライ中は他の魔法が使えない。が、慣性というものが世界にはある。

フライを一瞬止めて慣性があるうちに他の魔法を放ち、その後またすぐにフライを唱える。これが俺が考案した空中魔法戦だ。

これを突き詰めていく内に、フライの応用は「空中にトランポリンのような空気の膜を作り出す」に至った。

なぜできるか本当の答えは知らないが、フライのルーンが「空中物体制御」のように比較的抽象的な意味なんだろうと推察している。よく似たレビテーションは「空中物体浮遊」的な感じだと思う。

まずは、フライで普通に飛び出し、勢いに乗ったところで解除。

（ドット）魔法を唱えて、すぐにフライで空気トランポリンを作成。角度を調整しつつビヨーンと飛び出したところでフライを解除。また（魔法）を以下エンドレスリピート。

燃費の悪さは避けれないが画期的な戦闘方法だと思った。が、トランポリンで静止した瞬間という致命的な弱点に気づき、さらに改良を加える。

空気滑り台とか空気ジェットコースタとか色々悩んだ末に、空気トランポリンと空気ローラースケートを使い分け、戦術的な幅を増やすことでしばらくは落ち着いた。

予断だが、一度のフライの詠唱で、空気トランポリン複数作ることまでできた。精神力は多めにとられるし、魔法を切れれば、全て消えるけど。

そして、俺はあの憧れの剣の必殺技を覚えた

「リミットブレイクウウウ（ＡＣ版）超究武神霸斬！！！！」

空中のあるポイントを中心に、トランポリンで空中をあっちこっちにと跳ねながら（格好のためちゃんと足で着地？する）日本刀を振るう！

人によつては裏蓮華的空中コンボというところわかりやすいかもしれない。

実用性はあまりないと思う。

最後に、フライのルーン「イル・フル・デラ・ソル・ウエンデ」の早口なら誰にも、負けない！

ちなみに複数の魔法の同時発動及び、同時制御は基本的に不可能であつた。

ただし、発動した魔法が消えるのではなく、制御不能になるだけである。

つまり発現した”現象”は残る。

たとえばファイアーボールを打った直後にウインドカッターを打つと、ファイアーボールが残っている場合、ファイアーボールは消えないが制御を離れ、等速度に進む火玉となった。

＝＝＝＝その代償は＝＝＝＝

アンドバリの指輪の流出は解決した。後の原作前の出来事で覚え

ているのは

・モード大公夫妻が殺されてしまう＋肅清的な何かがあったような。

・ガリアのジョゼフがタバサの父さんを殺して、母の精神を壊して、人質的に？

ぐらいだった。

基本的に外国のことだし正直俺の手に負えるものではないし、そもそも俺が干渉することではないとも思っていた。

ティファニアとかタバサが主人公側であっただけで、外から見るとただのお家騒動だ、という思いが強かった。

だが、内政への口出しが許されると、話は変わってきた。諜報員が欲しいのだ。

・・・フーケの手腕が欲しい。諜報員にフーケが欲しい。

とはいえ、知っていた肅清をわざわざ見過ごして、ウエストウツドの孤児院にのうのうと保護の代わりに協力を求めにいく程、割り切れはしなかった。それに、この2つどちらかに手を出すとしたら、絶対にアルビオンだ。

比較的トリステインとはまだ友好関係にあるから国に入りやすいし、ジェームズ1世は弟を仕方なく処断した。という、記述があった気もする。

レコンキスタの発起の原因もなくなる。

それに対し、今の状態でジョゼフを出し抜けるとは全く思えない。そもそも流れがかわったことでどう動くかわからないジョゼフを監視したい。そのためにはフーケは必須のように思えた。

そこで、アルビオンに干渉できたら干渉しようと思ったのだが、すぐに次の壁にぶつかった。

諜報員を得るのに諜報員が必要だ。

そもそも、この世界にどうしても不満を抱かざるをえないことの
一つが情報の遅さである。

新聞にテレビにネット、世界情勢をほぼ、タイムラグなしに知り
えることを知っている俺はどうにもやりずらさを感じていた。

他国の情報にいたっては2週間前の話です、なんてことも多々あ
ることだ、これでは動く機を失う。

しかも、城に呼ばれた商人などに噂を聞くのだから情報の信憑性
にかけるのだ。

だから、迅速で正確な情報の必要性など子供でもわかりそうなも
のだが・・・

諜報員の導入は、父を説得できていなかった。

そんな金銭的余裕がない、人材がない、領主ではなく国家の仕事
だ。

というか、無理っぽかった。

優しく人格者でありプライベートの様子から器も広い、尊敬でき
る父は「立派なトリステイン貴族」なのだ。

金を精製できるので、本当は無限に資金は作れるし、金に物を言
わせて人材をかき集めることも可能なのだが、その方法はとりたく
なかった。

家族に隠れて、非合法的に作られた金でこそこそと組織運営をし
たくない、という甘えだった。

だが、この甘えは俺が真の意味でハルケギニアの住人、ラ・ロッ
タの人間となった証拠な気がして裏切りたくなかった。

この時の俺はハルケギニア人の子供としての俺と原作知識有の転生者としての俺の2つのうち前者に大きく傾いていた。
もしかしたら、傾きすぎていた。

平凡な精神は、異端であることを恐れる。ある枠内の中では自分の個性を主張しつつも、その枠からはずれることとなると途端に恐怖する。

「ハルケギニア」で裕福に愛情を注がれて育った精神は十二分に平凡だった。

家族に隠しごとをしたくないという思いとともに、純粹に諜報組織を裏金で操るような異端になりたくないという思いがあったのだ。ただでさえ、子供のころから大人の知性を備え、魔法の習得が以上に速い異端児だった。

「ハルケギニア人」となった今、これ以上の異端を積み重ねるのは避けたかった。

読者としての考えが、自分の正義を実行しろと言っている。

原作の知識も、このことの必要性を警告してくる。

そして、ハルケギニアとしての俺もそのことが必要だと認めている。

それでも、それでも俺はハルケギニアからはずれたくないという思いが強かった。

本当の精神年齢は40近くても、覚悟を決めたつもりでも、実際に人を殺したことがあっても、「ハルケギニア人の俺」はまだまだ、人間的にとんだ坊ちゃんだったのだ。

ガリアの事件が先に起きた。

それを知った俺は見捨てた癖に心の中でそれを残念に思いながらも、動こうとはしなかった。

そのまま、のうのうと先手を打てる時期を逃し、13歳になった頃にアルビオン王家の周りの動きがきな臭いという情報を受けて漸く、慌てて「しばらく旅に出ます」と置手紙をおき、アルビオンに向かったのだ。

無論、状況を正確にわかっていないのだから、具体的な対抗策など立てていなかった。

【06話】 認めたくないものだな…若さ故の過（略）

アルビオンの首都ロンディニウムに着き、早速情報収集に取り組んだ。

というよりも、着くなり早速情報が耳に入ってきた。どこもかしこも、その噂で持ちきりだった。

三日程前から、モード大公が幽閉されているらしい。

後は、明日にも処刑されるらしいという噂と、モード大公が何をやらかしのか？という噂が広まっていた。

もう時間がない。そう判断し、一通り街を周り様子を掴んだ後、早速強攻潜入を図った。

町を一人で歩いている兵を見つけ、こっそりと影から魔法を放つ。まずは鍊金、そしてウインド。

風で兵をぶっ放すわけではない。逆にもの凄く弱いように調整する。

ちよつと兵を掠めるだけのただのそよ風、一酸化炭素を大量に含んでいるが。

一酸化炭素は小難しい神経毒などと違い、非常にシンプルで便利な毒だった。

一酸化炭素中毒を起こし、苦しみ意識を朦朧とさせる兵。

「だ、大丈夫ですか？ 顔色が優れませんよ？」

そんな彼に心配そうに駆け寄り、

「僕は医学の心得があります。ちょうど近くに休める所がありま

すのでそちらで診断しますよ。」

と言い、肩を貸して歩き出した　　人目のない裏通りに向けて

後は、事前に目処をつけておいた人目のない場所で彼の意識を完全に落とした。

兵の制服を借り、念のため自分の顔を彼の顔にフルフェイス・チェンジし、彼を見つからないような所に隠す。

そして城の敷地に潜入する。この後は予想以上にあっけないものだった。

兵達の噂に耳をすませば、街より詳細な情報が早々に入ってくる。西離れの塔の臨時守衛、お前はいつ？いきなり仕事増えてたるいよなーなどと。

ほくそ笑むと、早速西離れにある塔に向った。

予想通りその塔の入り口は厳重に守られていた。

”当たり”である。しかし、ただの兵であろう”俺”に、この中に入る権限はないだろう。

まずはグルッと塔を回り、比較的塔に近づける所を発見した。そして、塔を「ディテクト」し、塔の構造の情報を得る。

さすがに周りに人もいたが、何をしているかはわからないだろう。杖など出さず、指輪で魔法を行使をしているのだから。

解析の結果、特に地下牢らしき作りはないので、どこかの部屋に、お約束的には最上階にでも幽閉されているのだろうとあたりをつけた。

だが、特別なスキルのない俺に、少なくとも明るい中の隠密潜入は無理そうと断念する。

だが、ここまで来たらもう引けない。

しばらく考え、『もつと地位のありそうなメイジに化けて堂々とする』作戦を思いつく。

本当に思い付きだったが、試してみて無理そうだったら、深夜の闇夜にまぎれて潜入すれば良いとも思っていた。

散策したり、「遠目」を用いたりして、いかにも偉そうで、しばらくこちらに來なそうなメイジを探すが、都合よく見つかりなどしなかった。

さすがに無理があつたか、と思い直そうとした時だった。運は俺に味方した。

その西離れの塔から、「偉そうなメイジ」が数人のメイジをひきつれ、出てきたのだ。

不自然にならるように、しかし全力で聞き耳を立てている。

「…ジエームズ王。…は…で今回も…ありませんでした。これは…覚悟を…いただくしか」

声をかけられた彼は沈痛な顔で黙っていた。

小声で話していた内容を確かに聞き取った。彼がジエームズ1世だ。これほど都合の良い対象はいない。

繰り返すが、運が俺に味方した。

ジエームズの顔を目に焼け付けた。

しばらくして、フェイス・チェンジを行い、鍊金で作ったあえて質素なローブを着た状態で西離れの塔に向かう。

「おい、お前…」

私の顔を少しのぞきみてはとした守衛長らしき人に向け、自分の口に人差し指をあて沈黙を促す。

俺はうかつに声をあげてはいけない。彼がジエームズの声の聞こ

たことがあるかもしれない。

かわりに彼の耳元に口を近づけ、低めの「囁き声」で話す。

「ジエームズ王は一度出て行った後、戻ってくることはなかった。命を賭けて部下にも絶対に徹底させる…これが意味すること、わかるな？」

顔を放し、彼を見やると少し青ざめた顔でこくこくと頷き、俺を中へ入れてくれた。

扉が閉まったところで、ほっとため息をついた。心臓がばくばく言っている。だが、これで後にはれることもないだろう。大成功だ。潜入など無論初めてだった。

なので

- ・怪しさを怪しさで隠す
- ・声を普段聞いたことのないものにする
- ・圧力を与えた短いやりとりで終わらせ考えさせない

など、俺なりに工夫はしたが、うまくいくかは半々の予想だった。いざとなったらあきらめて逃げるつもりだった。

そして、好都合にも塔の中は人気がなかった、というか人っ子一人いなかった。エルフに関する情報を秘匿にするためだろうか？確かにジエームズ的には「爆弾」である弟がいるこの塔にできるだけを人をいれたくないのかもしれない。

しかも情報の秘匿性から塔の中を任せられる人間も少ないと。

おいしい展開である。

そして、最上階の扉の前にはメイジが二人見張っていた。本当にわかりやすい、モード大公はここにいる。

だが、彼らはやつかいであつた。

彼らは先ほどの守衛達などに比べ、はるかにジェームズに近い。
俺がジェームズでないことにまず気づく。

どうやって部屋に入り、なおかつ彼らに部屋に人が入ったかもしれないという疑念すら持たせずに済ませるか、はすぐに思いついた。
彼らに全く干渉せず、扉を使わなければ良い。

あらためてディテクトしてこの屋内の構造・造りをしっかりと把握する。

スクウェアの固定化が施されているが、俺になら十分に鍊金で破壊・修復できる。

鍊金を行う際に、まずは分子を覆い分子間の結合を強化・保護していた精神力を打ち消すように行えば、あっさりと固定化は解除された。

緊張続きの潜入だったが、ここで初めてにっと笑みが出た。俺は、潜入の成功を確信してした。

後は鍊金で壁に穴を開けては直し（念のため）、壁に穴を開けては直す。

モード大公の部屋の隣でサイレントを施した後に、フェイス・チェンジを解いて彼の部屋に突入した。

彼は初めこそ慌てたが

・彼を助ける旨とそのために危険を冒してきたのだから信頼して欲しいことと

・助けるために情報が欲しいこと

を述べると人が良いのかあっさりとつらつらと語りだした。

- ・ エルフへの恋に逸早く気づいたサウスゴータ家の当主が情報の隠匿を強く進言してきており、誰にもばれないようにしてきたこと
- ・ 異常に気をはるサウスゴータのおかげで、知る人は本当に信用できる数人で、隠匿は完璧だったはずのこと
- ・ いつの間にかエルフと結ばれ、子ができたことを兄上様が知っていたこと
- ・ エルフの母娘は、そのサウスゴータでかくまって貰っていること
- ・ 先ほど兄が来て、エルフの母娘の居場所を教えることを要求してきたが、言わなかったこと

俺はこれでやっと、詳しく知らなかった今回の事件の流れを把握した。

どちらが前後するかはわからないが、おそらくジエームズはこの後、モード大公を殺して、なおかつエルフの搜索に出る。

サウスゴータがあからさまに怪しいことはわかってはいるはずで、そこを搜索しエルフの母娘を発見。

（おそらく反抗はしなく娘を逃がすことのみに専念する）母は殺され、フーケとティファニアが命からがら逃げ出した、というわけだ。

モード大公家もサウスゴータ家も取り潰され、大事件となったがエルフが絡むので情報開示はできない。

そして、一部の貴族から反感を買ったということだろう。

少し疑問に思った。

このままではモード大公自身、自分は殺され、搜索隊が派遣され、結局エルフの母娘は殺され、モード大公家もサウスゴータ家も潰されると気付いているはずだ。

そうなるであろう旨と、そうなって尚エルフの母娘への誠意を優

先なさったのですか？と尋ねると返ってきた返事は予想の斜め下だった。

「そ、そんなことおこるとは思えないし、そんな恐ろしいこと考えたくない……私はただ愛しい人を愛しただけだ」

愕然とした。この男は、エルフの愛人などがどれだけ「ハルケギニアでは異端」か、わかり切っていない。

美しいことを言っているようだが、何もわかっていない。それで、覚悟も何もなく「梓を外れている」。

ジェームズ1世の再三の警告に関わらずエルフの愛人と娘を離せなかった、と原作では記述されていた気がする。

事実そうだが、こいつは覚悟をもってエルフを愛し続けたのではない。ただの、世間知らずな「駄々を捏ねるだ坊ちゃん」だ。

自分の所行を正視できていなく、自分が持つ「影響力」に比べ、「人としての器」があまりにも小さく、権力者としての責務を果たせていない。

嫌悪した。心よりモード大公を嫌悪した。今思うに正に、同属嫌悪だった。

そんな中、自分の望む結果を実現するための手段を頭の所で思案していた。

そして思いついたのは、自分でもおぞましい、非道德的な正に「異端の所行」であったが、迷わず実行することを決めた。

これは自分がモード大公を見て反省し、反面教師にし、覚悟を決めた、などではない。

この情けない、軽蔑すらするモード大公と自分が同類な気がして、

それがたまらなく嫌で、それに対し反発しただけだったのだ。

結局俺もまた、覚悟を決めたつもりで「真の意味での覚悟などないただの、反抗的な坊主」なことに気づいてはいなかった。

この後、また深夜に来ることを告げ、俺は西離れの塔をあとにした。

城の敷地から出た俺は、例の兵の所に向かった。

その、意識を失った兵に兵の制服を着させて、担いで先ほどとは違う通りに出て、道行く人に尋ねる。

「この兵隊さんが意識を失って…この辺に不慣れなのですが、医学に心得のある方はこの辺にいますか？」

教えて貰った診断所に彼を連れて行き、しばらくすれば起きるという診断を受けた俺は、その医師と会話を続けた。

平民にも治療を行う、非常に感じの良い水の野メイジだった。

「良かった。人の死は悲しいですからね」

「そうじゃの、死んでしまつてはもう何もできぬからの」

「そうですね。ここでもやはり人の…特に平民の死は多いですか？」

「それはそうじゃ、水の秘薬など平民がおいそれと手に入れるものでもない。

少しでも重い怪我か病気にかかれば、平民にはほぼ確実に死が

待っており。

わしにできるのは精々ちょつとした薬草をあてがうこと程度じや。毎日のように、わしを頼ってきた平民がなくなっており。」

やはり、この時代の死は日常に溶け込んでいるらしい。

「そんなことはありません、自分を卑下しないでください。あなたのおかげで助かった方はたくさんいるはずです。

それに、平民にも医療の機会を与えるあなたの在り方は尊敬に値するものだと思います」

「だがの、事実この近くに住む平民兵がな、訓練中にできた傷から悪魔が入り、その病気が原因で今日亡くなったわい。」

……この好感の持てる人すら利用する。罪悪感を無理やり押し込め、俺は彼に提案した。

「そうですか……その、この話を聞かせていただいた縁もあります。

ぶしつけではありますが、その亡くなってしまった方の冥福を祈りたいと思うのですがお願いできないでしょうか？

故郷で私の親は死者を弔うことも行っていましたので。」

深夜、まずは遠見で西離れの塔の守りを確認する。

正面口だけ炎を焚き、守衛されているがそれ以外は真暗だった。つまり、守りがない。

そつと西離れの塔の側面に近づく、人がいて明るい昼間には無理だったが、今ならここから入れる。

学院もそうだが、スクウェアレベルとはいえ、固定化を過信しすぎだ。

サイレントを使い、音を立てないようにしながら、後は昼間と同じように潜入した。

そして、モード大公に再会し、モード大公に作戦を説明した。作戦のポイントは

・もうほとんど手遅れの所まで事は進んでいて（状況を必死に説得）、世間的に「モード大公」は亡くなるしかないこと

・ジームズ1世は非常に弟思い（聞いた話からも予測）なので、弟の最後の死の嘆願は受け入れるであろうこと

なので、

？腹を自殺したモード大公の死体、の精巧な偽者を作る。

このために、こつそりと兵の家族に死体を高額で売ってもらった。兵が死んで、保険や労災などない世界でこの平民の家族（妻、子供3人）が生きていくのはあまりに過酷であること。

それを、この兵が望んでないであろうこと。

恨んでもらってかまわないこと。を告げると、奥さんは涙を流し、心底悔しそうに夫の死体を売ることを承諾してくれた。

後は、死体の整形外科を行う。

- ・細胞の中の水の量の調整
- ・脂肪を錬金してお腹につめる
- ・髪の色を染める
- ・骨格を錬金で形成変化させる

などの処理を施していく。さすがに、「人」は複雑で何度何度も少しずつ処理を繰り返した。それでも終わっていない。

モード大公と見分けがつかなくするのは、結局朝までかかった。

？ジェームズ1世に遺書を書く。内容は

- ・公開処刑が決まり、自分の所業を見つめ直したこと
- ・王族に連なる者として、あり得ぬ行為をしたと反省していること
- ・エルフの母娘はサウスゴータに匿ってもらっていること
- ・そして、愚弟の最後の頼みを聞いて欲しいこと

1．彼女らの命だけは許してほしいこと。自分の血が流れる娘とその唯一の肉親となる母を追放だけで許して欲しいこと。

彼女らは、気性が大人しく、この手紙を見せれば納得するはずのことと彼女らへの説得

2．サウスゴータ家も許して欲しいこと

彼らは禁忌を犯してまで尽くしてくれた家であること。

その忠誠心、その忠誠心を今後は兄に向けることを約束することに免じて許して欲しいこと。

彼らに見せるように、今までの感謝とこれからはジェームズ1世の忠臣となるよう命令すること

？この場から離れ、その後サウスゴータで追放されると思う母娘を拾ってどこかで隠れて暮らす、無論保護する。見返りはサウスゴータの娘。

この3点が作戦の要だった。

最初、猛反発された。恐ろしい、外道の考え、おぞましい、などと散々に言われた。

「なら、このまま処刑され、あなたの愛人も娘も死ぬことになり

ます。好きな方をお選びください」
と決断を迫ると、しぶしぶ、仕方ない、という様な感じで納得した。

モード大公の顔には、自分はこの様な悪魔の選択を迫られ、むしろ被害者だ。と言わんばかりの表情があふれていた。

俺も、もう何のために、何故こんなやつのためにこんなことをしているのかわからなくなっていた。

最初はフーケを諜報員として彼女らに負い目なく堂々と迎え、さらに、悲劇のひとつでもなくせればと思っていた。

それが、状況状況に合わせていたら、いつの間にこんなことになっている。

あまりに割にあわないと思っていたが、ここまで来て引き返せるものでもなかった。

こいつがこんなんだから悪いんだ…こいつが正しい選択をするやつならこんなことにはならなかったし、俺もこんなことしなくてすんだのに…

本当に、本当に情けなく、皮肉なことに俺もまた諸悪の根源を「自分以外」に見出そうとしていた。

なんとか、モード大公の自殺した死体を作り終え、モード大公の服を着せたところだった。

モード大公も手紙を書き終えており、さて陽が上がりかけている…早く用意してずかるぞ、というときに窓から指す光に影ができた。

反射的に外を見るとこの最上階の窓の外から女性が部屋をのぞいていた。

ちやうど驚いた様な顔からニヤリといった顔になる。

そして、頭に浮かぶルーン　　ミヨズニトニルン！！

何故か、浮いているであろうその状態のままから炎が放たれ、窓を突き破ってくる。

ミヨズニトニルンは炎を放つと同時に背を向け、飛び去る。

向かってくる炎の規模は小さい、慌てて身体をひねり交すが、そこには偽の死体が

この瞬間に、俺の頭はスパークした。

炎は威力が小さい　　折角作った偽者が、燃えきることはない。重度の火傷を負った感じになるはず。

完璧だったはずの隠匿と情報の漏洩、そして今あいつがここにきたこと　　そもそも、黒幕がこいつらの可能性大。

俺の素顔を見られた　　ラ・ロツタに害が及ぶ可能性が高まる。ミヨズニトニルンは、必ず殺す。

今回の騒動、準備がギリ間に合った死体が残存、そしてその火傷自殺中になり自殺後なりに横槍が入ったでなんとか、大丈夫かも。怪しいけど。

だから、後は俺が打つべき次の手は

最速の詠唱で「フェイス・チェンジ」を唱える。

呆然としているモード大公の顔にかけると同時に、マントを扉に向けてほおる。

「何事！」

などと叫びがら扉をあける見張りのメイジ二人が見たのは、コワモテのおっさんと自分達に向かってくるマント。それに対し、

「狼藉者達め！」

と杖を構えるメイジたちにおれはほくそ笑んだ。せめてなんかしらの魔法唱えるべきだ。俺の仮想イメージよりはるかに弱い。

「ウル・カーノ」

その間に最短詠唱の魔法の一つ、発火を唱える。断続的に火を放つ魔法だが今回は一回限りで良い。火を放出する、と同時に目を瞑る。

その火は俺流解釈でちよつと特殊。

熱と光のエネルギーの放出が「火魔法」の本質、その「光」だけを極端に強くする。

「熱」だけの見えない火魔法の逆バージョン。所謂、太陽拳。

お前の技ちよつと借りるぞ、と心の中で言うことは忘れない。

その程度には、余裕であつた。

閉じた瞼に明るい光が届いた後、目をあけ、ムスカ大…じゃなかったモード大公の手をとり、窓に向けて走り出す。

得意のフライの詠唱を唱え、そのまま窓から飛び出した。これで俺らも「窓をわって潜入してきた賊」となる。

外に出ると同時にミョズニトニルンを探す　いた。飛んでいるのを見つける。

モード大公を抱えたまま、一度城の敷地外に着地し、モード大公をおろした。

「逃げでも隠れてでもつかまらないでください。とりあえず、作戦続行です。」

今日の夜、もしも私が来なかったら明日の夜に南門の辺りで落ち合ひましょう。」

と、フライで単身ミョズニトニルンを追った。些細な、それでいて大きな失敗に気づかぬまま。

【07話】 賽は投げられた

ご主人様にアルビオンの計略の状況を確認してくるように命令されたシェフィールドはロンディニウムに来ていた。

彼女はまずは処刑を待つモード大公を確認することにする。

場所はもう知っている。窓の所まで風石であがれば良いだろう。暗闇にまぎれて窓に近づいても、部屋の中を見るために光を出すと目立つ、守衛にもモード大公にも。

そう考えた彼女は、深夜は避け、朝焼けの時間に様子を伺うことにした。姿は見えてしまうがこちらの方がばれにくいであろう。

彼女がこっそりと部屋を覗き込むと、驚くべき状況だった。思わず、身を乗り出して凝視してしまう。

モード大公の死体があるが、生きているモード大公もいて、さらにもう一人のメイジがいる。

凄いものを見た。これは早速報告せねば、と思ったその時。メイジがこちらを振り向いた。その顔には驚愕の文字が浮かんでいる。その顔に嗜虐心をくすぶられた彼女は、報告に行く前に少しこの計略の邪魔してやるのも一興、と思い彼女は火石から炎を放出し、その後西離れの塔から遠のいた。

彼らは慌てふためき、対応に追われるだろう。

そう思っていたのだが、そのメイジが追撃をかけて来る。

あの状況から追撃？

もし、あの場を収めてきたのだとしたら相当な手練である。

しかもこちらは激しい戦闘になるとは想定しておらず、駒をそこまで多く持っていないときた。

グングンと近づいてくる彼を見て、彼女は気を引き締めた。

一方、杖を取り出しフライで飛び出して、彼女に追い迫るウィレムも余裕はなかった。

一晩中錬金やコンデンセーションなどを中心に魔法を使っていたせいで、精神力が残りわずかなことを悟っていた。

しかも、潜入中だったのでかさばる虎鉄なども持ってきていない。

「「いつきに片をつける！！」」

彼ら二人の意見は一致していた。

ウィレムは、杖を左手に持ち替え、8発は魔法無しで打てる状態の銃を右手で構える。

敵は「飛ぶ」とこと「攻撃」を両立している。

空中戦は一般的なメイジに対して圧倒的な戦力差を持っていると自負していた彼だが、同時に魔法を使える彼女と空中魔法戦をやりあうつもりはなかった。

パンッパンッパンッ

8発全てを発射するが、空中で飛びながらの銃撃など当たらない。だが、それでもいくつかはシェフィールドの近くを掠める。

この威嚇を受けて、シェフィールドは表情を強張らした。彼女は敵に強力な飛び道具があり、このままではやられると勘違いした。仕方なく身を翻して地上の木がまばらにある平原に着地する。

ウィレムもそれに続き、平原で二人対峙した。

「朝一に空飛ぶ天女にむけて攻撃とは、関心できないね？坊や。」

「そんな黒尽くめの目つきの悪い天女はいないですよ、しかも覗き趣味。」

「あんたに言われたくないね。死体を作るとは神をも恐れぬ悪魔じゃないか…何者だい？」

「そう聞かれて答える人が教えてほしいぐらいだね。でも、かわりに良いことを教えてやるよ…ジョゼフの使い魔！！」

先手を打ったのはウィレムだった。

自分の正体まで知られているとは思っていなかったのだろう。驚愕の表情を浮かべるシェフィールドを尻目に、ファイアーボールを唱える。

独自魔法で「見えない熱エネルギーの塊」をシェフィールドに向けて放出した。

最初ルーンに対して何も起こらないことをいぶかしんだ表情をみせたシェフィールドだったが、嫌な予感を覚え咄嗟に横に飛んだ。

見えない熱の塊が彼女のいたところを通過する。

だが、ウィレムは避けられたことに意識を止まらせることなく、続けて魔法を唱え始めた。

短詠唱のドット魔法エア・カッターだ。掴んだ主導権をそのまま保持し、彼女に何もさせないまま殺すつもりだった。

ここで熱が後方にあつた木にあたり、木が発火して燃え出す。

しかし、シェフィールドは気を散らさない。まして、視線をウィレムから離すことなどしなかった。

直感的に彼女はウィレムが「見えないファイアボール」を使ったことを理解していた。

彼女の中で不可解な現象や相手の正体への疑念は非常に大きくなる。

それでも彼女の勘が一瞬の判断のミスがそのまま自分の死に直結することを告げており、彼女は今までになく集中していた。

「後ろの火より、彼の次の詠唱に注目。：エア・カッター！風の刃が来る！と察知し、かわすために大きく飛び上がった。

ウィレムはエア・カッターを横一文字で放った。

結果としてシェフィールドは回避に上下運動を選択したことで命を救われた。

だが、地上に目をやり、大分離れたところにある大木まで切られているのを発見し、愕然とする。

ドット魔法の威力ではなかった。

この一合わせで、シェフィールドは自分が彼に敵わないことを悟

った。

自分はマジックアイテムを使った搦め手得意としているが、直接対決など本来、魔法の使えない自分の性分ではない。

本当に、出し惜しみをしている状況ではなくなった。

彼女は唯一もってきている最後の切り札を使う。

距離をとったところに着地し、3つの小瓶と3つの小さい人形を取り出した。

そして、3つの小瓶の中の血を、小さい人形にたらす。

スキルニル 与えられた血の持ち主を再現する人形にかけられた血は、各々ガリアの有能な部下のものだった。

「あんたたち、あいつを捕らえろ。無理なら殺せ！！」

一方、ウィレムはシェフィールドが高く舞い上がり距離をおかれたことで、先手が失敗したことを悟った。

苦々しい表情を浮かべる。次の魔法が打てる気がしない。精神力切れだった。

しかも相手は魔法人形まで持ち出している。最悪の流れだった。マジックアイテムを使われる前に倒すのがミョズニトニルンの必勝法なのだから。

それなりの魔法人形はかなりの実力をもつと思われるメイジになり、詠唱を唱え、魔法をうつてくる。

必死に自分の身体を動かし避けるが、所詮平民対メイジ3人、避けきれぬはずがない。

致命傷こそさせているもの、次々に傷を増やしていった。

おかしい。

シエフィールドはその様子を見てそう思った。あれから、一発も魔法を打ってこない。

彼の實力ならスキルニルを瞬殺してしまうのではないかという不安すらあったのだ。

いざという時はスキルニルをただの足止めに使うつもりだった。

だが、現状はどうだ？彼は魔法を使わず、自国のメイジ達が一方的に痛めつけている。

何を考えている？罠か？

いや罠、とは思えない。それをする必要がない、それくらいの圧倒的な力を彼は有していたはずだ。

ここで彼女は気付く。

魔法が使わないので使えない…精神力切れ？あの死体は彼が魔法で作ったので、それで精神力を殆ど使い果たした？

十分にありえる、と思った。彼が序盤からあんな切り札を使ったのは、それで戦闘を終わらせるためだったのだろう。

勝利を確信し笑みを浮かべ、そして思い直す。

いや、彼のことだ。どんな隠し玉を持っているかわからない。気を抜いてはいけない。

彼女が慎重に見守る中、メイジ達は彼を完全に追い詰めていき、ついに彼は放たれた突風を避けきれず杖を落とした。

彼がしまった、という表情を浮かべ、動きを止める。

「今だ、取り押さえる！」

メイジ達の一人が放った「拘束」が彼の身体を縛る。必死に抜け出そうとするところをメイジ達が地面にたたきつけるように押さえ込んだ。

彼女は今度こそ勝利を確信した。

「さて、坊やには死ぬ前にしゃべってもらわなければいけないことがあるわね。」

ウィレムに近づき質問をする。

彼は反抗的な目で睨んできた後、悔しそうに目をそらし、顔を下向きにして額を地面につけた状態で何かを言った

精神力がもうない。

このままでは負けることを悟った俺は賭けに出ることにした。

シェフィールドが俺に聞きたいことが山ほどあるとはわかった。

だから杖をわざと落として、こちらが無力なことをアピールすれば拘束される。

質問のチャンスを彼女に与れば、すぐには殺さないはず。

そして目論み通り、俺は組み敷かれた。

打てない魔法を無理やりでも打つ。できなければここで、死ぬ。
また、彼女だけを倒しても、まだ三人もメイジが残っているので意味はない。

一発だけでシェフィールドと3人のメイジを倒さなければいけなかった。

そこで、俺は自分を中心にドーナツ上に超高圧の刃が広がっている独自魔法のエア・カッターを思いつく。

今まで、こんなことを試したことはなく、ぶつつけ本番。うまくいくかもわからないし、有効範囲もわからない。

だから彼女とメイジ三人ができるだけ近くにいない必要もあった。

そして、条件が揃う。

負けたことをアピールするために、彼女を恨めしそうに睨んだ後、口を動かすのを見られたり、声が響くのを防ぐために、顔を地面に向ける。

そして、あたかも恨み言を言うかのように、エア・カッターを唱えた。

ふつと自分の身体の拘束が弱まる。

俺は立ち上がり、彼女の死体と3つの人形を見て、今回は運が良かったなと嘲う。

いきあたりばったり、お粗末にも程がある　おかげで、今回はずいぶんとリスクを犯すことになったし、危ないシーンも度々あった。

それでも、勝ったことを自覚すると、身体の悲鳴が急に響いてきた。

精神力を過剰に使いすぎ、身体もぼろぼろだ。

最後の気力を絞って、なんとか見つかりにくそうな木の根元に腰をおろした所で俺は意識を失った。

修正力という考えがある。

世界は異端を弾き出し、本来あるべき方向へと流れを戻そうとする、というものだ。

転生系の物語などには、ほとんどの確率でこの力がまとわりつく。この力が実在し、この世界で実際に働いたのかどうかはわからない。

しかし、彼の意識が失われていくうちに、確かに悲劇は始まっていた。

敢えてウィレムの所為とするならば、彼の失敗は3つある。

- ・モード大公と信頼関係を築けなかったこと。
- ・シェフィールド乱入当時、状況にまったくついていけず呆然としていたモード大公は、自分がフェイス・チェンジをかけられたことに気付いていなかった。そして、ウィレムもそのことを言及しなかったこと。

- ・魔法衛視やジエームズ1世が、彼をどのような存在と判断するかに対して配慮できなかったこと。

魔法衛視は王にウィレムのことを「顔は見えない・杖を持っていなかったと思う。良くわからない魔法を使った」と報告した。

城の敷地外に一人放置されたモード大公は、慌てて人のいない路

地裏に逃げ込んだ後に、一人物思いにふけた。

彼はおいていかれた、見捨てられたと感じていた。自分はそれなりに顔が知られている。独りで逃げれるわけもない。

そもそも、彼はなんだったのか。死体を作るような所業を行う奴である。信用できない。

「独り」となったことなどあまりないモード大公は、次第に不安になるとともに、どんどん疑心暗鬼になっていった。

そもそも彼の言が信用できない。

彼はまだ、兄がエルフを愛しただけで自分を殺すとは思っていないかった。

しかしこのままでは捕ったら、それに死体の偽者を作り兄を偽った罪まで加わってしまう。

死体を偽造し、兄上を欺こうとしたのは、それだけで処分されてしまうだろう。違う、自分はそんなことをしていない。

そして彼は「兄に申し開きをする」ことを決断してしまう。

兄ならしっかりと説明すれば、わかってくれるはずだ　そう、妄信して。

実際にこれが成功とした時、ジェームズ1世がどう判断したかはわからない。

しかし、現実はおつと無慈悲で、王族の死とはいえあつさりとしたものであった。

城に潜入した彼は、運命の悪戯かちょうど外に出ていた兄をあつさりと見つけてしまう。

そして「兄上様、兄上様！―」と言いながらかけようとする。

非常時に緊迫状態の中、王の護衛をしていた衛視は、王に駆け寄る不審者の首を躊躇無くはねた。

【08話】 共犯者と理解者と

驚いたのはジェームズ王側であった。

不審者を打ったつもりが、その首の顔は、みるみるうちにモード大公のものとなったのだ。

よく見れば体型などもモード大公そのものである。これはモード大公ではないか？という疑念が広まる。

しかし、モード大公の死は報告されており、王自身があれは弟だと確かめている…

ジェームズ王はすぐさまこの件に関しての口外禁止令を出し、情報隠蔽にかかった。

事の大きさから、これを厳守しなかったものには猶予なく死刑を与え、情報の漏洩を徹底して防ぐ。

理解不能な事件が続き対応に追われながらも、王の中では答えが出ていた。

監視に殺された者が弟だ。

弟の性格は知っている。

自分の死と引き換えに他のものの命を嘆願する。そんな殊勝な性格ではなかった。最後の最後に変わったのかとも思っていたが。

むしろ、困ったことがあった時はああやって、自分を頼ってくる方が弟らしい。

王族としては失格かもしれない。しかし人間としては、情けない

が少し手のかかる、だが非常に優しい愛すべき弟だった。

そんな弟を、誑かし、欺き、騙し、罪まで犯させ、死に追いやった連中 エルフ！

死体を作るなんてことも、杖を使わず謎の魔法を使ったのも、どう考えてもエルフぐらいしかできる存在がいない。

我が弟はエルフに唆されたに違いない。

ジェームズは自分の予想に確信を持ち、エルフ達、強いてはテフア母娘への憎悪を募らせた。

許すまじ、憎きエルフ共よ！！

ジェームズ王は、エルフの母娘のすぐさま搜索にあたる。

原作以上に怒りに駆られたジェームズにより、不幸にもモード大公家・サウスゴータ家は原作以上の悲劇を辿ることになった。

そして、激昂したジェームズは娘が見つからないことに納得しない。

しばらくの間モード大公に近かった家を中心に、強制搜索が行われる。無論、内容が内容なため、十分な説明などされない。

強行に行われる搜索の裏で、反乱の火種は確かに原作以上に大きなものへと成長していった。

俺が目を覚ましてロンディニウムに戻ると街は、モード大公家肅清の話で持ちきりだった。

俺が意識を失っている間に、何が起きたのか、詳しくはわからなかったが自分の作戦が失敗したであろうことだけはわかった。

さーっと血の気が引いていくのがわかった。今や、自分はモード大公家肅清に関与がない立場ではないのだ。

同時に世界の修正力を感じ、絶望していた。

しかし、ここであきらめるわけにもいかない。なんとか自分を振るいたて、サウスゴータに向かった。

だが、結果から言ってしまうえば、手遅れだった。

兵達はサウスゴータにとっくに入っており、サウスゴータは軽く占拠状態となっていた。

そして、搜索の名の下で行われた『虐殺』の後がありありと残っている。

おそらく原作以上の制裁ぶりだ…。

罪悪感がどっと押し寄せていた。

ただ、運命の悪戯か、逃げるティファニアとマチルダの二人に合流することができた。

彼女らの逃亡を手伝い、安全な場所に避難してもらう。

「あんたが何で手伝ってくれるのかはわからないが、助かったよ。礼を言う。」

こんな中、マチルダに感謝を述べられ、やるせない気分になる。

俺は様子を見てくるからしばらく、ここで待機していてくれというとロンディニウムに急いだ。

だが、南門にモード大公は来なかった。

ここでようやく俺は自分のミスに気づき、予想ではあるが事の流れを把握した。

そう、これは自分のミスが発起原因なのだ。

戻った俺を、二人が出迎える。

だが俺は、この二人を目の前になると、何をどう話していいかわからなかった。

多分、弱っていたことと、今思えば贖罪し、許してほしかったのだろう。

俺は真実を隠すことに耐え切れず、自分が転生者であることも含め、今までの流れをほぼ全て彼女らに話した。

ゼロ魔という小説の中での世界観。原作知識。

そして、今回の事件に関して

小説であったであろう流れと実際に辿った今回の流れ。

そして修正力の考え。

伝えたいことを伝え、最後に謝罪した。

「本当に申し訳ない……」

マチルダは当然、激昂した。

「申し訳ないで済む話では、ないだろ！あんたが余分なことをしたせいで！」

「すまない……俺もこんなことになるとは、思ってたかった。」

「は、なんだ。結局その修正力のせいだって言いたいんじゃない

か。

違う。そんな『修正力』だの、『本当』はこうなるものだっただの、そんなの関係ない！！『本当』なんてここだけだ！

あんたが変なちょっかいをして、ミスって招いた最悪な結果だ！あんたが私達の家族を殺した！私達の全てを奪った！！

私に手を貸して欲しかった？ふざけんな！誰が協力なんてするもんか！！」

そう言つて、彼女は踵を返していった。

彼女の言うとおりだった。

フーケが欲しいと打算で考えて動いて、しかも下準備もしない万全とは程遠い状態で望み、結果失敗した。

それを負いきれなくなったら今度は「自分は良い方向にもっていかうとしたのに…修正力で」と自己弁護だ。

情けない。情けなさすぎて笑いが止まらなかった。

「ハハハハハハハ…駄目だな俺も」

見やると、テファが心配そうに見ていた。

「すいません、マチルダ姉さんが…」

「そういう君はいいのかい？俺はある意味君の両親の仇なんだぞ。」

「私は、あなたの言う原作どうこうはさておき、その原作で起きた流れがいずれおこるとは思っていましたから。」

マチルダ姉さんも本当はわかっていると思います。」

「でも、俺が余分なことはしなければモード大公が自分で兄をうまく説得したかもしれないだろ？その可能性を全て壊したのは、俺だ。」

「そんな風に自分を責めないで下さい。父の性格を私は知っています…そんなことはしないでしよう…でも人間味のある優しい方でした。」

「…でも、そんなのわからないだろ？俺の登場で心が揺さぶられなければ、自分の最後を自覚し、土壇場で心境の変化が起きえたかもしれない。」

そう、わからないんだ。

わかつているのは、俺が原因でおそらくジェームズ王の怒りを余計に買い、最悪の結果が起きたことだ。

それどころか言い訳がまいなことまで言って、マチルダさんを怒らせて…」

「いえ今回のことは、あなたからしてみたらそうかもしれませんが、本来、私達の問題なんです。」

でもマチルダ姉さんは優しいので、私達一家が悪いとは思えなかったのだと思います。

その時にちょうどあなたが現れて、しかもご親切に説明と謝罪までしてくれて……

貴方なら受けとめてくれる、理不尽な怒りでもそれを受け止めてくれる。

そう感じたでしょう、それであなたに甘えてしまったんだと思います。」

ある意味真実かもしれないが、ほとんど詭弁だ。

王族としての禁を破ったモード大公家族、そしてそれを隠蔽したサウスゴータ家も原因を担っている。

それでも、最後のトリガーを引いたのが自分であることはかわらない。さっきのマチルダの怒りだって本物だろう。

「だけど、慰めてもらっている。それがわかった。」

彼女だって悲しいはずなのに、そんな彼女に気を使わせ、慰められてる。

だから、これ以上彼女に醜態を見せたくなかった。

「そっか……そういう考えもあるか。…ありがと、少し気が楽になった。」

彼女に向けて、ぎこちなくとも、にこりと笑ってやる。

それを見た彼女は、すこし驚いた顔を見せて…そして、優しくにふんわりと微笑んだ。

「ふふ、先ほどの話が本当なら、神様があなたを選んだ理由がわかる気がします。」

「転生者に？こんな男を？」

「そんなことないですよ。確かに、今はちょっと情けないかもしれませんが。」

あっけらかんと言われた齒に衣着せぬ発言に少しだけ毒気を抜かれる。

「…その自覚して、傷ついているんだよ？」

「だからですよ。」

「……ちゃんと自分を客観視できるから？」

「それもそうです。だけどそれだけじゃないです。

物事をしっかりと見据え、それに傷ついてても、それでも、次を見据えられます。また立ち上がって、さらに強くなる可能性を持っています。」

驚くべきことに彼女の中で俺は高評価らしかった。だが自分自身が納得できなかった。だから、自嘲気味に言う。

「それは、過大評価だよ。事実、重圧に耐え切れてない所だっ

」

「でも私が慰めていると気付いて、無理に気を使ってくれましたよね？」

正直、びつくりした。そんなあっさり俺の心情が見破られるとは思っていなかった。

顔を上げて彼女を見ると彼女はいたずらが成功したような笑みを浮かべている。

「あなたは今辛いはずですが、悔しいはずですが、自分を許せないと思っているかもしれません。」

だから、今は泣いてください。叫んで下さい。少しの間だけ、情けない自分に素直になってください。

大丈夫、あなたは立ち直れます。もっと強くなれます。だから、今は泣いていいんです。」

彼女はそう続け、優しく包みこむように、全てを許すように微笑んだ。

「う…」

抑えきれない。それがわかった。

泣く権利などないと思っていた。それでも、泣きたくて喚きたくて、それを我慢していた。

それに火がついてしまった。一度灯された火は連鎖的に自分の中の様々な感情に燃え移り、爆発、広がっていく

「うわああああああああああ」

彼女にすがり付き、泣いた。

胸に顔をうずめ、鼻水を垂れ流し、大声を上げて泣いた。

頭をなでくれる彼女の手が、優しくて暖かくてやけに気持ちよかった。

テファの胸を借りて泣いたその夜。独り夜空を見ていた。
赤と青の2つの月。ぼうつとその月を見て、たそがれていた。

深く考えることなく、流れるままに行動していて、死体を弄ぶことまでした。

今回の一連の行動を、世界にとってより良い方向にもっていくものためのものと正当化していた。

そして、修正力かどうかはわからない。だが、自分のミスが、自分の準備不足が、悲劇を起こす一因となった。

その罪悪感に耐え切れず、逃げたいと思っていた。

思いつきり泣いたせい、比較的心穏やかに、正面から自分を見

つめることができていた。そんな時、

「よう」

と、マチルダが話しかけてくる。

「先のことはあやまらない。だが、お前に協力はする。助けてもらったのは事実だしな。」

テファ達の面倒を見ることが条件だが。」

そっか、ありがと。と頷く俺を見てマチルダは続ける。

「代わりに……代わりに、今回みたいなことはもうごめんだ。」

だから、お前は絶対に立ち止まるな。躊躇するのも立ち止まるのも言い訳するのも、今回で最後だ。

やれることは全てやれ、出し惜しみなど絶対にするな。おまえのためでかまわない。

原作知識とやらの利用でも悪魔の所業でも戦争でも、お前が必要だと感じたらなんでもやれ。

そしてお前の行動の結果どんなことが起きても、お前の行動が裏目に出てハルケギニアが崩壊することになっても……

……その時でさえ、全力で次のお前にとっての最善手を打ち続ける。」

言われなくてもそのつもりだった。俺は、俺の全てをぶつける。

今回のことで身をもって体感したした。俺は多く人の「命運を握っている」とまでは言わないが、「大きく作用する」。

それからは逃れられない。

それでも、自分の思うように行動するしかないのだ。そして、それによって生じるあらゆることを負おう。

マチルダを見つめて、はっきりと言う。

「ああ、わかってる。覚悟は決めた。マチルダ……俺に、ついて来てくれ。」

「な、な、な、何んだい。急にさっきまであんなしょぼくれているに……」

と、顔を赤らめ意外と初心な反応を見せるマチルダを見ると、笑いがこみ上げてきた。

くつくつくと笑っていると、調子に乗んなど冷静になったマチルダにはたかれた。

結構良いキャラしてらっしゃるらしい。

ラ・ロツタ領に向けて出発した旅中のある晩、見張りをしていると、テファが起きてくる。

これは半ば毎晩のことになっていた。

「ウイレムさん、いつもお疲れ様です。」

「これのくらいのことはしないとね。明日も歩くからしっかり休んでいたほうが良いよ。」

「大丈夫です。ただ、目が覚めてしまって……」

それから少し会話をする。地球のことなどを中心に。同じくらいの星に60億人も人が住んでいるというのには大層驚かれた。

そんな話も途切れ、少し間が空いた。

炎のバチバチという音がやけに響く。

その炎をテファはじっと見つめていた。闇夜の中、照らされた顔が炎と共に揺らめく。

それが今にも消えてしまいそうで、俺は気づけば声を発していた。

「テファ、この前は本当にありがとう。」

「いいえ。私がしたいようにしただけですから」

俺の突然の発言を受け、テファはあつという間に表情を取り戻す。それが、逆にやるせなくて、少し躊躇した後にもう一步踏み込んだ。

「…じゃあ、俺もしたいことがあるんだ。」

「え？」

「その、君はまだ泣いてないだろう？ 姉に心配をかけたくないから。」

だから、その、俺ばかり胸を借りたのでは不公平だし、俺ので良ければいつでも……。

いや、無論、無理にとは言わないけど！」

言っている途中からどんどんと恥ずかしくなり、緊張でどもった。

顔も赤くなっているのがわかった。全身全霊の覚悟はどこにいった？

テファは何を言われたのか理解できないのか最初呆然としていたが、俺の意味する所を知り、顔を下にしてに向け、おずおずと言った。

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて…」

彼女が近づいてくる。頭が胸に触れる。緊張して、ドキドキしていた。

彼女の泣き声が耳に入るまでは。

「ウツツウツ…お父様、お母様……」

胸の中でシクシクとすすり泣く彼女の両親の死の一端は、確かに俺にある。

だから、彼女は絶対に守る、守り切ってみせる。そう思った。

ガリア。

ハルケギニアが誇る最大の国で男は嬉しそうに笑った。

「くは、くハハハハ、まさかミューズがこんなにもあっさりとやられるとはな。凄腕の打ち手がいるようだ。」

キングの位置すら掴ませないとは。…アルビオンの手勢、いやこの時期に動くということは、トリステインかゲルマニアか…どちらにせよ、このような相手だ。キングが動かないというのも失礼にあたろう…ハハハハハ。

余も『本気』でお相手しよう。楽しませてくれよ、名も知らぬ名手よ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0440n/>

原作？なにそれおいしいの？

2010年10月9日14時38分発行